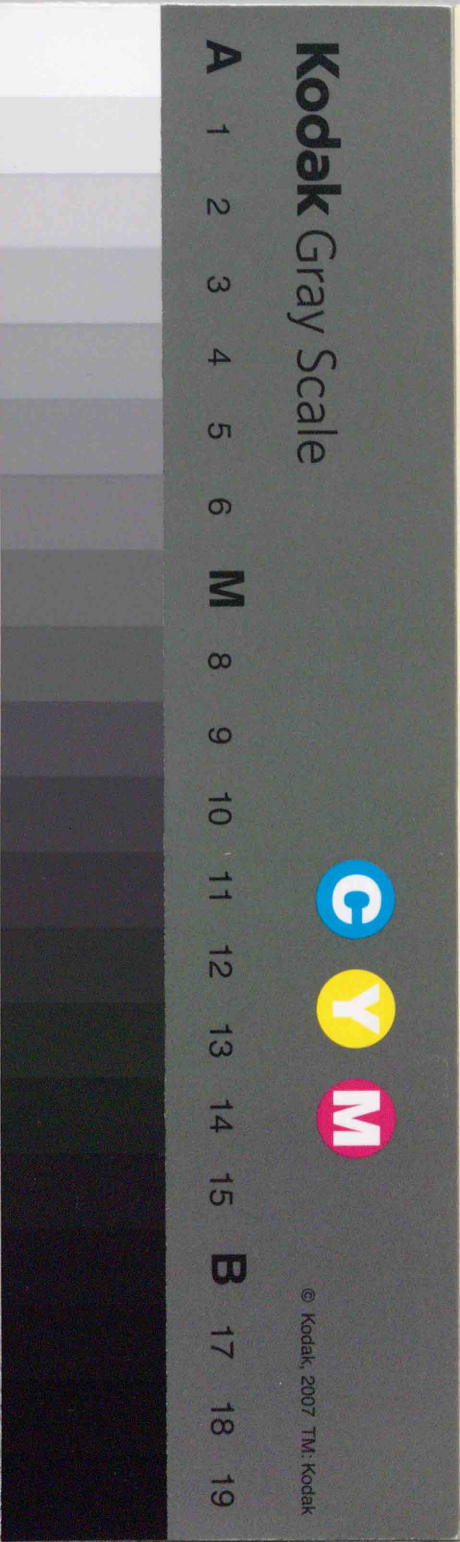
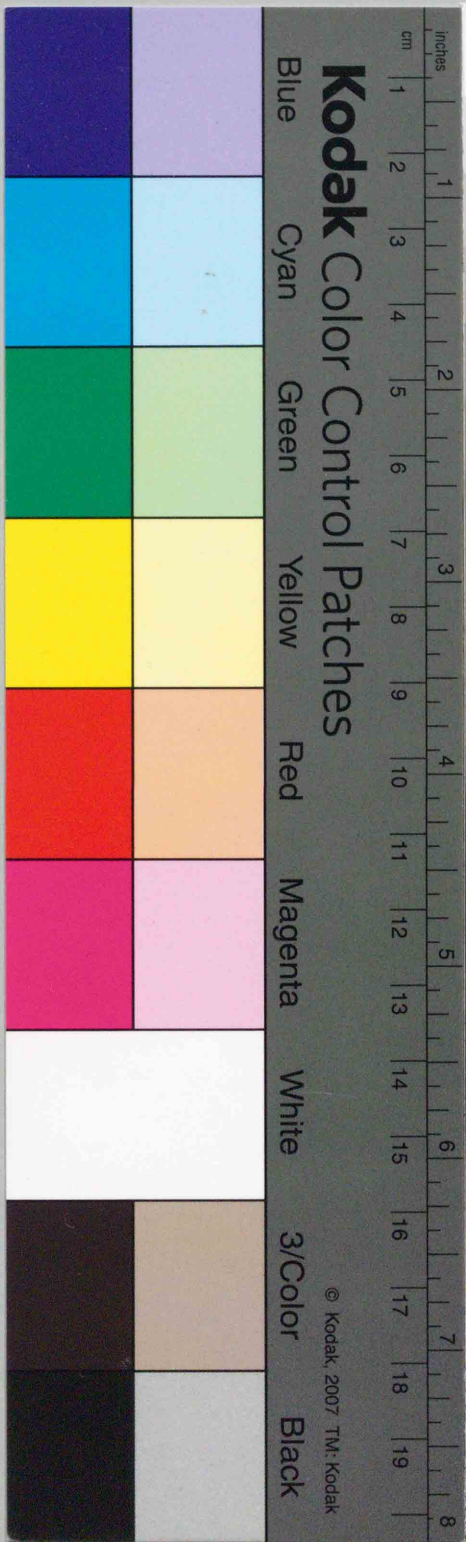
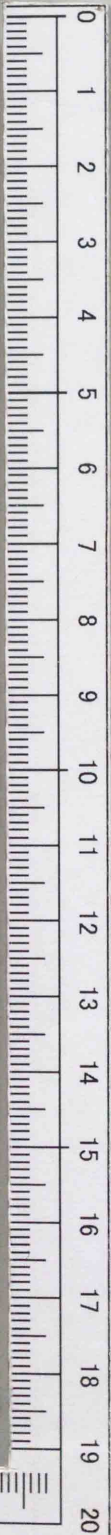


訂改  
帝國新讀本  
卷三

375.9  
Hall  
資料室



41671  
教科書文庫  
4  
810  
41-1927  
200030  
1522



資料室

375.9  
Hall

文部省檢定

中學教科用

昭和二年十月二十七日

文學博士芳賀矢一編

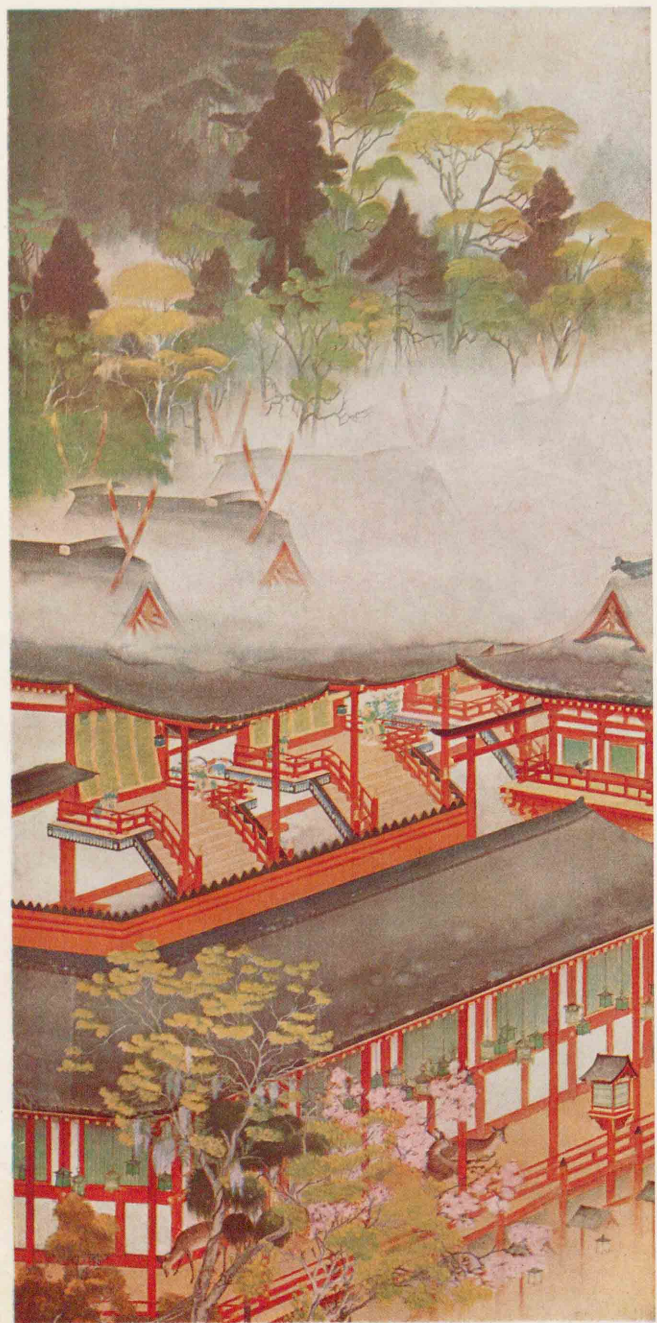
改訂  
帝國新讀本

東京

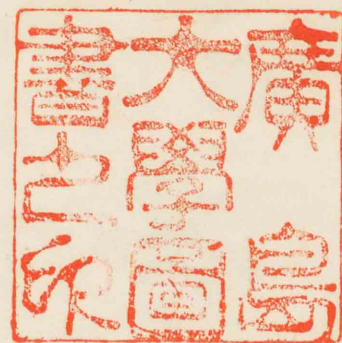
合資  
會社

富山房發兌





神苑春雨  
山口蓬春筆





訂改  
帝國新讀本 卷三日次

一 大日本國……………	一
二 國史に返れ……………	德富蘇峰……………三
三 勿來關……………	熊田葦城……………七
四 春の一日……………	島崎藤村……………一〇
五 お遍路さん……………	荻原井泉水……………一四
大佛の柱くゞり自修文……………	十返舎一九……………一九
六 奈 良……………	（高等小學讀本）……………二四
七 潮の岬……………	杉村廣太郎……………二七
八 蛙の聲……………	近松秋江……………三
九 趣味の巖島……………	五十嵐 力……………六



一〇 少ビット……………四

一一 伊達政宗……………湯淺元禎…一六

一二 金剛山の景勝……………菊池幽芳…一五

    一 萬物相……………一五

    二 水簾洞……………一五

    山上の鐘(自修文)……………前田夕暮…一四

一三 春の水(川柳)……………一六

一四 桶狭間の戦その一……………遠山信春…一七

一五 桶狭間の戦その二……………遠山信春…一七

一六 きらめく稲妻……………中村秋香…一八

    飛行機がとぶ(自修文)……………久米正雄…一八

一七 田園雜興……………大町桂月…一九

一八 山寺……………若山牧水…一九

一九 佛の化身……………相馬御風…一〇五

二〇 桃源郷伊豆の大島……………有島生馬…一〇三

二一 正覺坊……………北原白秋…一〇九

二二 丘の上……………吉江喬松…一〇五

二三 空の景色……………(高等小學讀本)…一〇四

二四 九十九里……………徳富健次郎…一〇九

二五 夏の日の夢……………西條八十…一〇四

    芙蓉(自修文)……………高瀨虚子…一〇七

二六 談義僧……………柴田鳩翁…一〇五

二七 桃山御陵……………田山花袋…一〇五

    ゆかしの杉(自修文)……………幣原坦…一〇六

二八 感謝……………吉田絃二郎…一〇七

二九 揚子江の秋その一……………南部修太郎…一〇七



三 揚子江の秋その二……………南部修太郎…一七

三 郊外所見……………竹友 巖…一七

三 秋のさ中……………田部重治…一八

三 草雲雀(自修文)……………薄田泣菫…一八

三 法隆寺の鐘……………高濱虚子…一九

三 ひとの親(短歌)……………(明倫歌集)…一九



訂改 帝國新讀本 卷三

一 大日本國

とはに

御祖の神の	皇孫降りて	寶祚は天地と	この國、この君、	大君、民を	國民、君をば	さながら一家の
産ませし國に、	君とし知らず。	窮りあらず。	世に類なし。	子の如おぼし、	親とし慕ふ。	睦はとはに、



この國、この民、

世に類なし。

鎮の山

大和の國の

鎮の山と、

神さび

富士の嶺み空に、

神さび立てり。

貴き皇國の

姿を見せて

高きはこの山、

世に類なし。

日出づる國の

しるしの花と、

櫻は霞に

まがひて咲けり。

けだかく雄々  
しき  
國ぶり

けだかく雄々しき

國ぶり見せて、

匂ふはこの花、

世に類なし。

## 二 國史に返れ

徳富蘇峰



功科表  
經典

「國史に返れ」日本國の歴史は大和民族の系圖である。吾人祖先の功科表である。日本帝國の寶庫である。日本國民の經典である。日本國を知るには、國史を透して知るより他に方便がない。國史は實に忠實な案内者である。信賴すべき指導者である。

吾人は歴史的に考慮せねばならぬ。すべての人類は平等觀よりすれば皆同胞である。しかし、歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊の性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國ともまた同じでない。十個國あれば十個國の相違があり、百個國あれば百國の差異がある。この特殊の國性を維持する上に於て、始め





干涉  
體面

て獨立國の意義が完うされる。獨立國の本義は形式的に他の干涉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主であらねばならぬ。詳にいへば、精神的に自國の國性を把持し、保存し、開展し、發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しいこと善いことのみが満ちてはゐない。必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべきことのみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。人間の所作にはさまざまの過失もあれば、罪惡もある。しかし、總括していへば、日本の歴史は決して大和民族の耻辱史ではなく、光榮史である。いかに日本の皇室が世界に比類のない有難い皇室であ

緩急の際

(一) 明治元年三月十四日明治天皇が紫宸殿で神々に誓はせられた新政の方針五個條  
(二) 明治二十二年二月十一日發  
乾燥無味

剗切

るか、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。いかに日本の國民がその一旦緩急の際に處して、護國の精神に猛烈に且つ勇敢であつたかは、國史がその證人である。いかに大和民族の中に世界的偉人と比較して、一步も劣らぬもの、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足るものを生じたかは、長い年代の中に屢接觸したところである。即ち我が明治天皇の盛徳大業も、國史の背景によつて始めて明白に、精詳に、剗切にこれを會得することができる。國史の背景がなかつたならば、五個條の御誓文の如きも、一種の雄快な文書たるに止るだらうし、帝國憲法の如きも、單に乾燥無味な一部の法文に止るであらう。



固陋頑冥  
詭激狂妄  
閑却す  
株守す

醉生夢死す

諒解す

凡そ固陋頑冥な戀舊思想や、保守退嬰の島國根性や、若しくは詭激狂妄な赤化主義や、架空浮誇の摸倣精神や、いづれも我が國史を閑却するからして起るのである。現状を株守するのにも國史を知らないが爲、現状に不安を感じるのにも國史を知らないが爲、國民的自信力を失墜するのにも國史を知らないが爲、自惚根性で醉生夢死するのにも國史を知らないが爲ではないか。

「國史に返れ」とは、すべての國民が歴史家となれといふのではない。それには専門の學者がある。たゞ日本國民として日本の歴史のその大いなる筋道を諒解せよといふのである。この歴史は精神的に於ける日本の潜在して居る寶藏で

ある。苟も國民的に生活し且つ活動しようとするならば、まづこの寶藏に向かつてすべてのものを求めるがよい。

温故知新

—國民小訓—

三 勿來關

熊田葦城

武衡すでに縛に就き、家衡誅に伏し、與黨また斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑にわたりて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々、また戰時の秋に似ず。行き行きて勿來關に差掛る。山上模糊として白きは雲か。地上續紛として翻るは雪か。雲と見えしは梢

(一)清原氏の豪族。出羽七年(一〇七四)に源義家捕へられた。殺された。  
(二)清原武衡の甥。寛治元年(一一〇一)に殺された。  
(三)源頼朝の干天仁元年(一一一一年)に殺された。  
(四)常陸と磐城との國境。  
續紛  
模糊



兵馬倥傯

襟懷

逸興頓湧

一かへり二  
かへり  
口吟む

長亭短驛

の花、雪と思ひしは散りくる櫻。關山春深き所、心なき身も感  
などか起らざらん。兵馬倥傯の間に在りては、月を觀ても樂  
しからず、鳥を聽くも嬉しからじ。今や干戈すでに収りて襟  
懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて、願望すれば、胄も花、甲も  
花、身はいつしか畫中の人となる。逸興頓湧きて、詩情自ら  
動く。

吹く風をなこそその關と思へども

みちもせに散る山ざくらかな

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするを  
も知らず。

かくて長亭短驛、日敷を重ねて京に着す。百戦功を重ねて

勿來關 谷口香嶠筆





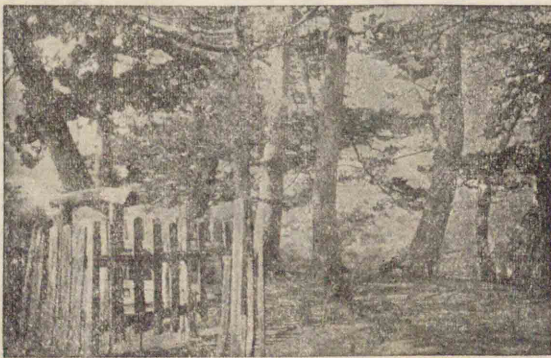
忠孝

忠孝

忠孝

門前市を成す

一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人、義家に向かひて語る、陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地に在りつれば、皆それそれに見候ひなん。これのみこそ羨ましき心地すれ」と。義家畏まりつゝ、答ふ、心長閑けく候はんには、ゆかしきことも候ふべけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候はず。たゞ勿來關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、そのまゝにうち過ぎな



勿來關の址



をこ  
秀歌

んも口惜しく、をこの口吟に任せてかくなん仕りぬる。とて、かの吹く風の歌をうち誦すれば、實にも秀歌をこそいたしつれ。とて、感歎特に淺からず。花は櫻木、人は武士、この人この花を詠じて、花と人と千古に香し。

—日本史蹟—

四 春の一日

島崎藤村

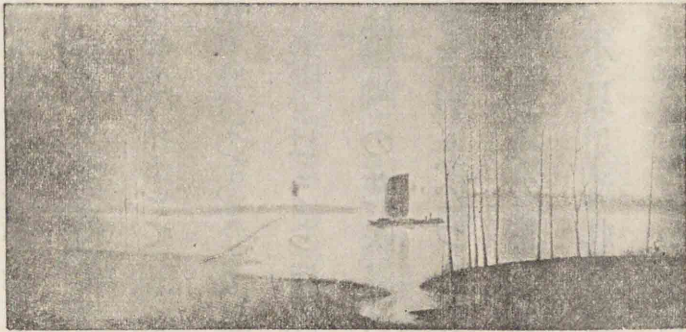
ことしの春は雨多く、ともすれば空曇りて、快晴といふべき日は少かりしを、珍しくもけふは雲収りて、空の色も眼に心地よし。かくて興も湧きあがり、足も浮立ちければ、友を誘ひて利根川のほとりに遊ぶ。  
見るたび毎に新しきは、朽ちず盡きざる自然のさまなり

(一)群馬縣利根郡文殊山から發し、武蔵下總の界をなしてゐる本州第二の大河。

酔ひしれる

恍惚

幽懷を遣る



(筆年古原上) 川 根 利

けり、殊に雨収りての後なれば、樹といふ樹、草といふ草、げにいづれも緞美しき若葉を伸べて、活々と大氣を呼吸するさま、目に見ゆる心地す。花やかに射す日の光の麗しさよ、柔かに吹きわたる春の風の爽かさよ。我は酔ひしれたるが如く、恍惚としてこの景色の中を行くに、松生茂れる小高き岡あり。友はここに遊ぶことを好みて、常に來りて幽懷を遣るとかや、右に左に眺め入るに、松が根に咲出でたる一もとの花あり。蘭かと思へば蘭に



はあらで、あら、ぎの花なりけり。さるにても、その花の形の  
畫きたらんが如く、塵も据ゑざる風情の貴さよ。とて、友は花  
を愛づるの情に堪へてや、摘取りて黒き帽子に挿みぬ。その  
花をかざして微笑みて松蔭に立てる姿は、古の物語中の人  
物を目のあたり見る心地さへして。

一眸のうち  
えもいはず

(二) 共に茨城縣  
下總國北相  
馬郡

我等はうち連れてこの岡を下りぬ。利根川の畔に出づれ  
ば、楊柳の花咲満ちたり。高き岸に上りて眺むるに、遠き山々、  
近き村々、いづれも一眸のうちに歛りて携へ來りし雙眼鏡  
に入る桃の花の景色、えもいはず。

小貝川流れて利根に入るあたりは、左に戸田井の柳萌出  
でたるが見わたされ、右には羽根野の漁家兩三軒岸に臨み

て、物洗ふ女のさまも情趣を添へたり。舟を浮かべて鮪か釣  
らんと綸を垂れたるさま、籠を背負ひ櫂の目立ちたるを懸  
けたるが椿の花蔭を唄ひ行くさま、煙草を吹かす農夫の心  
安きさま、柳に繋がれたる馬の嘶くさまなど、げに、車東西に  
馳せちがひ、煤煙暗く空を覆へる都の空とことかはり、かゝ  
る田舎ならでは見らるまじき景色なり。我は友と共に此方  
の岸をさまよひ、彼方の堤を傳ひて、日一日、川のほとりに眺  
め暮しぬ。

馬を牽き鋤を肩にして歸る農夫の後に附添ひ、眺め飽か  
ぬ川の畔をさまよひ歸るに、俄に鳴きいだしたる蛙の聲に  
誘はれて、友の指さす方を眺むれば、彼方に立てる野の家あ



り、藁葺の屋根は春の星を帯びて、寂しき中にも深き趣を具へたるは、そもいかなる人の住めるにかあらん。

### 五 お遍路さん

萩原井泉水

山莊

遍歴す(一)僧の空海

りりんといふ訝えた音が、遙かの山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――お遍路さんとは、何といふ親み深い言葉だらう。――四國八十八個所に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とはいへ、四國を一巡することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として、大抵のことではないので、四國の代りにこ

功德(一)香川縣大川郡大串崎の北方海中

岡山縣(二)備前國岡山市。山陽線鐵道の要驛。

香川縣高松市(三)

小豆島第一の都會(四)岡山から十八哩、高松から十二哩

の(一)小豆島にある八十八個所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得ることとされてゐる。島四國(二)といふ言葉もできてゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡山(三)から若しくは高松(四)からくるお遍路さんは、船で土庄港(五)に着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた



西國順禮(渡邊香涯筆)



先達

札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海の近い麥畑の中の道をたどつて行く。それは繪である。美しいことである。この山莊にまで聞えるりんりんといふ牙えた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものと見える。

教門

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑に路を歩くのに好い氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふことだ。この頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡してくる。一體遍路といふものは、いつ頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くす

眞實の道

る上からいつても、各自の信念を厚くする上からいつても、誠に好いことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る所で愛せられる。また恵まれる。お遍路さん同志もまたお互に遍路であるといふことの爲に信賴する。また扶助する。これが實に好いことだと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは、遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識からくるのだ。この道に參するには、知識も、修養も、資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、



子供でも、たゞ一つの道を信ずることによつて、この尊い心持に一致することができるとだ。南無大師遍照金剛」と讚仰する聲が出てくるのだ。これは實に美しいことだ。争鬪と欺瞞との満ちた社會の中にあつて、信賴と扶助とに心を合はせて行くくらゐ、美しいことが他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。

そしてこれは獨りお遍路さんの上のことだけでは無い。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならぬ物を負うて、自分の名前を書いた札を撒散らしながら、自

分自分の道を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが行はれてゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちはまづ彼等の信と愛とを以て人生を歩きたいものである。

— 山水巡禮 —

大佛の柱くゞり [自修文]

十返舎一九

大佛殿方廣寺、本尊は毘盧舍那佛の坐像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎兵衛北八ここに法施し奉りて、彌なんと話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやあ

(一)江戸時代の滑稽小説家。本名は重田貞一。「膝栗毛」の著者として最も名高い。天保二年(一八三一年)歿。年六十九。  
(二)京都市下京區大佛正面(二正十四年(二二四六年)豊臣秀吉の建立。屋敷、地震、雷火等の禍に罹り、今は舊觀を存してをらぬ。  
(三)大日如來。法を養錢を上げるがうせいなもんぢやあ、豪勢と書く、壯大。

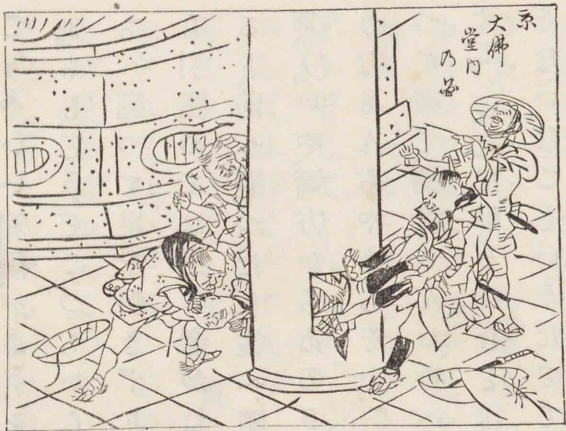


田舎道者  
田舎から出て  
神社佛閣の巡  
歴する者。巡  
廻者。

ひよんなこと  
妙なこと。異  
様なこと。

ねえか。あのかうしてござる御手のひらへ、疊が八疊敷けるさうだ。あのお鼻の穴から人が傘をさして出られるとよ。おや、御背中に窓があいてゐらあ。北あれは大方汐を吹く所だらう。彌鯨ぢやあるめえし。北おやおや、あれみんなが柱の穴を潜つてゐるわ。彌ほんに、こいつは奇妙奇妙。この御堂の柱の許には、ちやうど人の潜るだけ切抜きし穴あり。田舎道者ども戯にこれを潜りぬける。北八同じく潜り、北こりや、おもしろい。しかし、おいらは潜れるが、彌次さんは太つてゐるからぬけられめえ。彌おれだつて、なにこれが。北八を引きのけ、四つばひになつて、柱の穴へからだ半分ほど入れかけて、一向ぬけられず、あとへ戻らうとするに、脇差の鐙が横腹につかへて、痛みこらへ切れず、彌次郎顔を眞赤になし、あいた。あいた。こりやひよんなことをした。北おや、どうした。ぬけられねえか。彌これ、手を引つはつてくりや。北は、こいつはをかしい。彌次郎の両手をぐつと引つはる。彌あいた。あいた。北弱い男だ。

初手  
はじめの時。



大佛の柱くぐり (藪挿毛栗膝)

ちつと辛抱するがいい。彌あとの方から足を引いてくれる。北承知承知。と後へ廻り、両の足を捕へ、やあえんさあ、やあえんさあ。彌「あいた。あいた。」北「ちつと堪へなせえ。よつほど出かけたやうだ。やあえんさあ、やあえんさあ。」彌「あ、待つてくれ。待つてくれ。腰骨が折れるやうだ。こりややつはり前の方から引出してくれ。」といふ故、北八また前へ廻り、両手を捕へて引く。北「やあえんさあ、やあえんさあ。それまたこつちへよつほど出て来た。」彌「こりやたまらぬ。あいた。あいた。北八これではいかぬ。初手のやうに、北え、いろいろなことをいふ。」とまた後から足を捕へ、やあえんさあ、やあえんさあ。彌「待つて。待つて。こ



算段  
がくふう。かん  
がへ。てだて。

瀬  
をり。時節。

あのさん  
あの方。

いうたてて  
いうたてて  
いんま  
今。  
さかい  
から(故に)。

りやどうでも前の方から引いてもらはう。北え、そんな前へ廻つたり、後へ廻つたり、引出しては引戻し、いつまでも果しがねえ。こりやいい算段がある。そばに見てゐたりし参詣の人を頼みて、北もし、どうぞこつちからおめへ引張つて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。彌ばかあいふな。両方から引張つては、出る瀬がねえ。北、出る瀬がなくても、両方から引張ると、前へ廻つたり、後へ廻つたりするせわがなくていいわな。参詣の人、いや、両方からあのさんのからだを引伸したら、つい出られさうなもんぢやあるぞい。北、こりやいいことがある。酔を一升も買つて来て、彌次さんおめへに吞ませよう。彌なぜ、酔を吞むとどうする。北はて酔を吞むと瘦せるといふことだから。参詣の人は、そないなこというたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ、どこぞへいて、樋借つて来さんして、頭を後の方へ打ちこまんしたがよいわいの。北なるほど、こいつが早い理窟だし。

土砂  
加持(一種の  
瘧治)につか  
ふ砂。  
一番の桶  
ここは大きな桶  
をいふ。

こだはる  
つかへる。

いきむ  
力む。

し、それでは命があるめえ。参詣されば、そこはどうも請合はれんわいの。こりや、わしが智慧借そわいの。何ぢやると、あのさんのからだを柔かにして、引出すがよかるさかい、かうさんせ。土砂とて来てか、けさんせい。田舎者すんだら土砂のうぶつかけずと、一番の桶さあ買つて来なさる。手足をちとべしよん曲げたら、はいるべいのし。彌え、いめえましいことをいふ。むだどころぢやあねえ。北、早くどうぞしてくれぬか。北、待ちなよ。はあ、おめへ脇差の鐔が横腹へこだはつて、いてえのだ。と手を差入れてひねくり廻し、やうやう脇差をぬいてとる。彌、いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。北、どれどれ、いや、時にどなたぞ前の方から押出して下さいませ。わしが足を持つてこつちへ引出しますから。やあえんさあ。やあえんさあ。参詣、それ出るわいの。まちつとぢや、いきまんせ。彌、あ、う、あ、う。北は、う、出る奴がいきむから大笑だ。彌、あ、いてえ、いてえ。北、しめたぞ。えんやあ。えんやあ。そりや出たぞ。出たぞ。とやうや



あなおそろし  
柱の穴に感動  
詞の「あな」を  
いひかけ、傘  
といつたので  
すぼめると詠  
んだ。  
(一)大佛の南蓮  
華王院は寺の  
名三十三間  
堂は二間と  
南北を立て、  
柱間三十三  
計六十六間  
長寛二年(一  
八二四年)後  
白河法皇創建  
(二)九著 江戸  
神田町人彌  
次郎の行記に  
よせて、江戸  
時代の東海  
道中、風俗を  
おもしろく  
つたく書きつ  
いたもの。

うのことにて引出せば、彌次郎は大汗を拭き拭き、ほつと溜息つきながら、やれやれありがてえ、こりやどなたも御苦勞でござい申し、た生むよりか生まれる身はよつほどせつねえ、これ、着物が擦切れ、あばら骨が今にびりびりする。」

傘さして出るお鼻よりはしらなる

あなおそろしや身をすぼめても

かく詠み興じて大笑となり、それより御境内をめぐり、蓮華王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見ん

三十三間堂のながさを、

(二) 東海道中膝栗毛

六 奈 良

一

若草山も春日野も、

なめうかま

油のうな 雨かふら

うましや女の

若草山は

元明

正倉院

元正 聖武天皇の御

梅徳 一光仁

かすみこめたる春景色

ふるき都の名残とて

花は音の色に咲く、

古人いへらく奈良七重

七堂伽藍八重櫻、

二

(二) 大佛殿に佛燈の

光は今もかゞやきて、

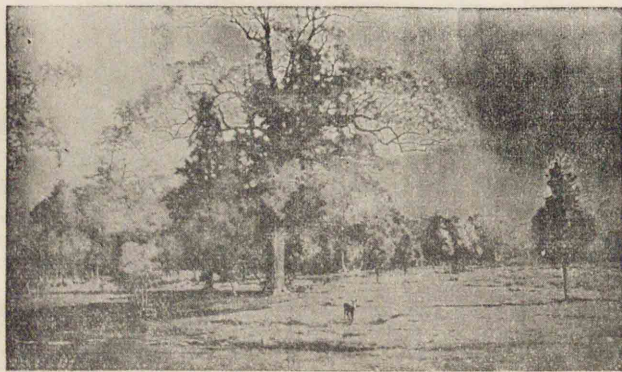
(三) 正倉院は天平の

音を固く封じたり、

古人いへらく(五) 蟲干や

甥の僧訪ふ(六) 東大寺、

三



(筆己克宅三) 野日春

(二) 東大寺の中堂、  
聖武天皇の建  
立。  
(三) 聖武天皇の御  
物などを藏め  
る。  
(四) 聖武天皇の御  
代。  
(五) 蕪村の句。  
(六) 華嚴宗の大本  
山、聖武天皇  
の創建。



(一) 蕪村の句。仲磨とは安倍仲磨のこと。

(二) 奈良縣添上郡佐保村を流れる小さい河。大和川の上流。

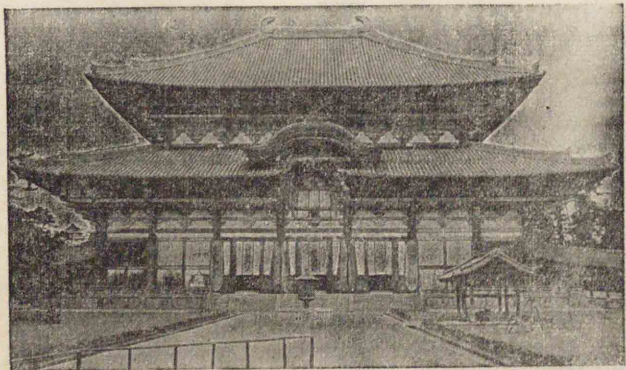
(三) 奈良縣葛城郡に在つて、奈良市の西南方に當る。

(四) 几董の句。

鹿の鳴く音に誘はれて  
三笠の山を離れけん、  
満月はやく猿澤の  
池の水の面にうかびたり。  
古人いへらく仲磨の  
魂祭せんけふの月。

四

(二) 佐保の川原は水あせて、  
石にさゝやく音しづか。  
かへりみすれば葛城の  
山のいたゞき雪白し。  
古人いへらく大佛を  
見かけて遠き冬野かな。



東大寺の中堂

— 高等小學讀本 —

### 七 潮の岬

杉村廣太郎

(一) 和歌山縣東牟婁郡本州最南端の岬。

磯馴松

巍然として

山骨

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かにうち續いて、その間に薊蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぼつりぼつりと、ところどころに立つてゐて、それに繋いだ牛の姿が、いかにも春めかしい。村の少女がこの芝生で鬼事でもするのか、陽氣を笑聲が遠くから聞える。右の方には燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな所に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重



寄せては返  
し寄せては  
返す

煙波縹渺

(New Guinea)

また、  
フィリピン

(Australia)

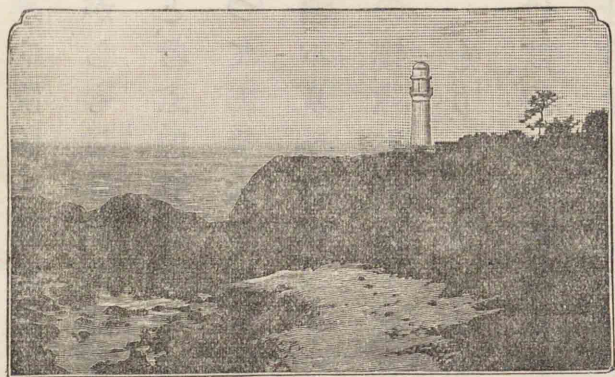
(オーストラリア)

(Los Angeles)

日本人の多く  
住んでゐる都

となく並んで、これに太平洋の大波がどうどうと、寄せては返し、寄せては返してゐる。

僕等は今日日本の本土の最南端の一角に立つた。うち開けた太平洋の海面、煙波縹渺として、その果をいづことしも覺えぬ。地圖を按ずるに、ここから正南は恰も蘭領印度のニューギニアを隔ててオーストラリアの大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北アメリカはカリフォルニア州のロサンゼルスまで、間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、いかにも世の中から棄てられた所のやうに聞えるが、その實この一角が即ち日本と世界との接觸する所である。



潮の岬の燈臺

まづこの岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶にその針路を示してゐる。この無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。更に海洋の望樓に至つては、夜となく晝となく、苟もこの下に船の影さへ見えたなら、内外いづれの國の船たるを問はず、必ずその名を問ひ、その行先を尋ね、さてはその用向を聽いて、傳ふべき所に傳へる。かう世界的にできた所に育つた潮の岬の人々として、その中から濠洲や米國に出稼するもの



〔明治四十二年四月〕

〔Keat. イギリス東南端の一州〕

の多く出て来たのも無理はない。荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は、小さいながらも世界的の民だと思つて、ふと自分のことに氣がつくと、けふ四月の二十二日。去年は愈、ニューヨークの見物を終つて、あす大西洋に乗出さうとした日。一昨年はちやうど今頃バリからロンドンへ向かふ途中、海峽を過ぎてケント州ケント州の櫻桃、杏、梨今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である、をりしも望樓で頻りに信號旗が揚る。それと急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばちばちとけた、ましい音を立てて、電信をかけてゐる。

色めく

今まで静まり返つてゐたこの日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。

沖には通報艦カニの淀ヨドが行く。

——へちまのかは——

### 八 蛙の聲

近松 秋江

まだ氣候のよく定まらぬ時分に咲く櫻は、例年の通りやつと咲きだしたと思ふ間もなく、雨の爲に敢へなく散つてしまつたが、二階の縁側に立つて遠くの郊外に眼を放つと、新緑の色が爽かに、遠近の森や籬落カサを點綴してゐる。これから懐かしい青葉の五月になるのだ。

この間ぢゆう、四月に入つてからも約半月許の間、一日と



開ける

して春らしい美しい日影も見なかつたが、きのふけふは愈ほんたうな春が来たことを思はせるやうな麗かな日が照つてゐる。縁側に立つて、靜かに春開ける風物を眺めてゐると、どこからともなく、遠くの方から蛙の啼く聲が微かに聞えてくる。私はこの春先の蛙の啼く聲を好む。それはもの憂げな、懐かしみのある、安らかな休息を誘ふやうな音を含んでゐる。

ここらあたり郊外の田も、畑も、年々市人の住宅地になつて、今は高臺の下の低地に僅かばかりの田圃が埋め残されてゐるばかりである。その田圃の際に日々どこからか塵埃を積んだ車が来て、恐しい悪臭を放つ塵埃を捨てて、田を埋

蠶食す

めてゐる。蛙の自由な棲息場は、その爲に日々蠶食されて行くのである。蛙の聲は大方そつちの田圃から聞えてくるのであらう。人類の増殖は勢ひ自然を破壊し、人類以外の他の動物を驅逐して行く。これは己むを得ぬことであるが、また愛惜の感も深い。文明はどこまで進んでも窮極するところを知らないであらう。しかし、我々は人間ばかりで住みたくな。我々以外の動物も、植物も、ならうことなら共に自由に榮えさして置きたいものである。

山吹の花

蛙の啼く聲を靜かに聽いてゐると、私は自ら山吹の花を聯想する。山吹の花の咲く頃はちやうど今である。或山裾を



假睡を誘ふ

挿秧

繞つて流れてゐる小溝に沿うた田舎道を歩いてゐると堰の畔に山吹がしなやかな枝をかざしてゐて、緑の小草の茂つた畦で、蛙が假睡を誘ふやうに、微かな聲で啼いてゐる。淡紅色の蓮華草の咲亂れた田には、土手を溢れるやうな漫々たる春の水がしかけられて、農夫はやがてそこに挿秧の用意をしようとしてゐる。

私は田園を歩いてゐて、屢、そんな畫的な光景に出會ふ。さういふ自然の情趣に恵まれてゐる所は、近畿の地方に多い。京都から奈良の方へ行く木津川近くの村里などには、特にそれが多いやうである。芭蕉が

山吹や宇治の焙爐の匂ふころ

風味

綜合す

といつた句は、最もよくさういふ氣持をいひ表してゐる。

筍

筍の新しい風味のあるのもまたこの頃である。私は筍を味はふといふよりも、筍そのものを見るのが好きである。芭蕉も

筍や幼き時の繪のすさび

といつてゐる。多分幼い時に筍の繪を描いたことを思ひ出したものであらう。

私は筍の形や色、またそれ等を綜合したあの若々しい、そして雄健な勢に無邪氣な興味を感じる。幼い頃、村の子供と伴なつて、よく竹藪の垣根を探して、筍狩をしたことを懐か



しく想ひ起す。雨に濡れそぼつた緑の荆棘の中から、恰も大地の底から生え出たもののやうに、すくすくとして頭を顯してゐるのを見出した時の悦を忘れ得ない。

私の故郷の家の裏の茶園の隅に、もう四十年も前に父が植ゑて置いた孟宗竹があつた。後に、屋敷の中に竹藪のあるのは家相に好くないといつて、根から掘取つてしまつた。しかし私は、屋敷の中に竹藪があつたとて、それが家相に障る道理はないといつて、笑つてゐた。自分は家郷を出てからすでに三十年になる。それでもう悉く掘取られたと思つてゐたのだが、根が地中に少し残つてゐたものと見えて、近年行つて見ると、また一かどの孟宗竹の藪ができてゐる。そして

總菜

早春の頃になると、一夜の春雨に、幼い筍が小牛の角のやうに、大地を割つて頭をもたげる。をりをりの總菜の用にも足りる。

東京では府下の目黒が栗と筍との名所であつたが、今はだんだん開拓されて、そんな田園の趣味は跡形もなくなつた。京都地方は今でも、秋の松茸と共に筍の産地である。京都の筍は確かに美味である。松茸と筍との美味なのも道理で、京都近郊の松の葉の緑と竹の幹の緑とは、他の地では



(筆朝紅咲雜) このけた



見られぬ美しさである。京都近郊の山林の美は、この松と竹とである。

### 九 趣味の嚴島

五十嵐 力

(一) 廣島縣(安藝國) 佐伯郡大野村 から七町。  
(二) 島の中央なる 高山をいふ。

趣味の眼から見た嚴島(一)の中心の味はひはどこにあるかといへば、私たちは第一に彌山(二)を背景として立つた低い美しい社殿を、あの大鳥居のあたりから眺めたところにあると思ふ。

まづ藝州本土の對岸から船を備うて、ぎいぎいと艚の音おもしろく漕出でる。青一色で塗潰したやうな恰好のよい島だと思ひながら漕いで行くと、その一色の中から、違つた

色彩の社殿や堂塔が、次第に著しく浮出てくる。初には木片を立てたやうに見えた鳥居が、だんだんと大きさを加へてくる。また漕ぐほどに、鳥居も、社殿堂塔も、益々大きき鮮かさを加へてくる。その中に次第に進んで大鳥居の下にくると、私たちは覺えず驚きの目を見はるであらう。見よ、目の前には高さ九間、棟の長さ十三間、地軸とも天柱ともいふべき朱塗の巨柱が、海を壓して跨がつてゐるではないか。向ふを見ると、青雲の中に沖つた彌山の麓(三)には、二十幾棟の社殿が美しく左右に延びて、赤い柱にゆるやかに反つた檜皮葺の神々しい姿を、水面に映してゐるではないか。その色彩を見よ。形状を見よ。一つ一つの建物の整つた姿を見よ。多くの建物が

檜皮葺



廻廊や橋に繋がれて、美しい釣合を表してゐるのを見よ。何といふ美しさ、氣高さ、神々しさであらう。

社殿の中心たる本社は寶殿である。寶殿の左右に、百二十七間といふ長い廊下が繞らされて、その間に百八つの神さびた鐵の燈籠が釣つてある。この寶殿を中心として、檜皮葺や瓦棟の多くの建物が、朱塗の圓柱に支へられて、低く美しく並んでゐる趣。縱向、橫向、いろいろな社殿が仲よく馴染んで、大鳥が翼を廣げたやうに、橫長に建つてゐる趣。更に晝は鮮かな色と美しい形とを細かに見せ、夜は百八の燈火——白砂青松の間に點在する石燈籠を加へると夥しい數に上る燈火——を天上の星にまがへ、干潮には大地に立つた脚

長のすくやかな姿を見せ、満潮には波の上に浮かんだ龍宮城の幻のやうな光景を見せる趣。これ等のすべてが、何ともいはれぬ調和をなして、緑の山と白波の海との間に鎮まつてゐる趣。高さ、大きさ、ものしき、荒々しさは、前後の護衛者たる山や海や、鳥居に譲つて、社殿自らは、千木も、堅魚木も、しびも、しやち銚もない尋常な檜皮葺を、朱の圓柱に支へられて、低い謙遜な姿を横たへてゐる趣。この重疊累積した美しさ、ゆかしさを、何に譬へようか。

私はあの社殿を見る毎に、よくこんなことを考へる。設計者の鬼神は、海底でできあがつた龍宮城を、巖島のあの入江に据ゑる爲に、波の上にせり上げたであらう。靜かにせり上



凝視す

立脚點

るのを凝視しながら、山と海とに對する釣合を見計らつて、  
ここだといふ所で、びたりとせり上げを中止させたであら  
う。そしてこれを眺める恰好な立脚點を、今の大鳥居の位置  
に定めたのであらうと。

— 甲鳥園隨筆 —

### 一〇 少ピット

雙肩に擔つて起つ  
國歩艱難  
不世出の英才  
William Pitt.  
(<sup>(1)</sup>チャタム伯  
(<sup>(2)</sup>Earl of Chatham.)  
(西曆一七七八年—一七七〇年)

西曆一千七百五十九年五月、天は英國の爲に、將來その國  
を雙肩に擔つて起ち、國歩の艱難を救ふべき不世出の英才  
を下した。ウイリヤム・ピットは即ちその人である。彼は當時  
の長老政治家として畏敬された老ピットの第二子で、父に  
對して少ピットと呼ばれてゐる。

神童

綽名



少ピット

少ピットは幼時から身體が弱かつたが、その才智は非常  
に發達して、夙に神童を以て許されてゐた。尋常の小兒のや  
うに戶外で遊戯するのを好まないで、常に書籍に親しみ、こ  
れを何よりの快樂とし、熱心なウイリヤム。または「少年哲學者」の綽名を  
得た。單に記憶力の優秀であつたの  
みでなく、その思慮、判斷も、少年時代  
から老熟してゐた。老ピットが功勞  
によつて伯爵を授けられた時、僅かに七歳の少ピットは母  
に向かつて、「私は次男に生まれたのが喜ばしい。父上のなさ  
つたやうに、花々しく下院で働くことができるから」といつ



〔Cambridge〕  
英國の有名な  
大學。英京ロ  
ンドン市の東  
北四十八哩に  
ある。

舌を捲く

たといふ。貴族の長男はその家を繼ぐので、下院の議員たる資格を得られなからである。  
ピットは十五歳でケンブリッジ大學に入學したが、その學才は忽ちにして同輩を凌ぎ、學長をして舌を捲かしめた。しかのみならず、その起居の端嚴なことは、他の學生の模範であつた。

永眠

時局

いち早く

老ピットの永眠は少ピットが十九歳の時であつた。父が時局の困難な問題の爲に、重い病の床から出て議場の演壇に立ち、最後の大演説を試みた時、少ピットの若い眸は、熱心と敬愛とに輝いた。演じ終つて父が卒倒した時、いち早く驅付けて介抱したのは少ピットであつた。父は再び起たなか

有爲



聲望

つたが、その精神はその子に傳はつて、更に偉大な力を發揮した。子は父の偉業を繼ぐことを生涯の目的とし、父は我が子の自分よりも有爲なるべきを知つてゐた。  
父の歿後、ピットは益々精勵して、學才を磨き、辯舌を練り、二十一歳の時、早くも議員の總選舉に選ばれて、下院の一議席を占めた。かくて始めて壇上に立つて處女演説を試みた時、滿場の人はこの少壯議員に好奇の視線を注いだ。だが、その鮮かな論旨、きつぱりとした態度、銀鈴を振るやうな美聲に、一同酔へるが如く、感歎の聲は堂を搖がすばかりであつた。  
ピットの聲望は日を経るに隨つて高まり、一千七百八十二年には推されて内閣の一員に列し、越えて八十三年十一



危惧

快刀亂麻を  
斷つ

信望

比肩す

折衝  
國民民福

月には遂に内閣總理大臣となつた。時に年二十四歳。餘りの青年であるから、國民中には輕侮と危惧との念を以てこの内閣を迎へたものもあつたが、己を信ずることの飽くまで篤いピット(一)の才力と愛國心とは、快刀亂麻を斷つ勢を以て、當時の紛亂を解決し、漸く國民の信望を得、十七年の久しきその内閣を持續した。二十四歳の若年で首相となり、よく國家の危殆を救つたこの人に比肩し得べきもの、古來各國の政治家中、果して幾人あるであらうか。

ピットは一方には内政に意を用ひ、實業を振興し、財政を整理し、交通を改修して、國民民福を進めると共に、他方には外國との巧妙な折衝によつて、大英國の地歩をして確實鞏

(一) Napoleon Bonaparte (拿破崙) コルシカ島に生まれ、西暦一八〇四年、二十四歳、五十四歳、全歐洲を席卷す。一指を染む。畫策。 (二) Aralar. (三) Horatio Nelson. (四) Waterloo. (五) Arthur Wellington. 英國の將軍。且つ政治家。西暦一七六九年、一八五二年。

スペイン西南端の海角。一八〇五年の沖て行はれた。英國の海軍提督。西暦一七五八年、一八〇五年。今のベルギーの一村落。一八一五年。死命を制す。

固(一)ならしめることができた。殊に晩年に於て苦慮したのは、佛帝ナポレオン一世との對抗であつた。當時ナポレオンは殆ど全歐洲を席卷した勢を以て英國を窺つたが、ナポレオンの雄圖を以てして、なほ英國の本土に一指を染め得ず、終に怨を呑んで没落の悲運に陥つたのは、ピットが病弱の一身を以て國難に當り、内に國民の愛國心を鼓舞し、外に名將勇卒を送り、畫策大いに努めた偉功に歸せねばならぬ。トラファルガルの海戦に佛國の大艦隊を全滅させたネルソン提督も、ウォーターローの陸戦にナポレオンの死命を制したウエリントン將軍も、その初は實にピットの人を見る明識によつて推舉された人々であつた。



勇猛心

今はの時

生來虚弱なピットは、不斷の勇猛心を以て多年國事に奮闘したが、一千八百六年、四十七歳を以てその光榮ある一生を終つた。當時ナポレオンの勢力はなほ盛であつて、聯合軍の敗報は頻々として來た。ピットは重病の床上、その報知を得る毎に、深く國家の前途を憂へて、心を傷ましめた。今はの時にも、「お、我が國家よ。」と一言の叫を漏らしたといふ。ピットは實に短命であつた。けれどもその愛國の至誠に燃立つた精神は、永く大英國の國民の心に生きてゐるのである。

(一)慶長五年徳川家康會津の上杉景勝を討つた。

(二)陸前國。

搦手

一一 伊達政宗

湯淺 元 禎

(一) 會津征伐の御時、伊達左京太夫政宗は急ぎ本國に歸り、搦

夜を日に繼ぐ

(一)磐城國(福島縣)西白河郡白河町

(二)磐城國(宮城縣)刈田郡白石町

累代の仇

(三)徳川家康。  
(四)上杉景勝。

手より攻入るべき由仰を承り、大阪をうち立つて、夜を日に繼ぎて馳下る。白川より白石まで、皆敵の中なれば道塞がりぬ。常陸國を廻りて、磐城相馬にさしかゝつて國に歸らんとするに、相馬また累代の仇なり。然るに政宗僅かに五十騎許引具して常州を經、磐城と相馬との境に至り、まづ相馬が許に使を立て、このたび徳川殿上杉を征伐し給ふにより、政宗搦手より向かふべき由の仰を承りぬ。路すでに塞がり候ひしほどに、やうやうこの城に馳着きぬ。餘りに早めて道を打ちし故疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の足休めて、あす國に歸り入らんと存ず。といはせたり。  
相馬長門守義胤これを聞き、あつばれ運の盡きたること



窮鳥懷に入  
る時は獵者  
もこれを殺  
さず

評定す



伊達政宗

ぞかし。さらぬだに伊達は相馬が年頃の敵なり。ましてや身  
方討たん一方の大將承りたりといふものをいいでい今宵  
一夜討して、案内知らぬ奴ばらを一  
人も残らず討取つて、年頃の仇に報  
い、また今度の賞にも與らばや」とて、  
やがて民家をしつらひて迎へ入れ、  
人々集めて、夜討の評定したりけり。  
ここに水谷三郎兵衛といふもの、遙  
かの末座に候ひけるが、進み出で、末  
座の意見恐れ入つて候へども、すでに會議の座に列なりて  
候へば、所存を残すべきにあらず。抑、窮鳥懷に入る時は、獵者

たばかる

瑕瑾

(一)磐城國(福島  
縣)相馬郡  
未の時

兵糧

もこれを殺さずとこそ申し候へ。政宗ほどの大將、年頃の恨  
を棄てて君を頼みて來りしを、たばかりで闇々と討たれん  
こと、勇者の本意にあらず、永き弓箭の瑕瑾ならずや。また彼  
が國境駒が峰に至らんに行程僅かに二里、けふ日未だ未の  
時にさがらず、政宗が國に入らんとだに思はば、日夕ならざ  
るに到るべし。それに僅かの勢にて留ること、深き慮なから  
ざらんや。たゞこのたびはよきに警固して國に歸し、重ねて  
戦に臨まん日、勝敗を天運に任せらるべきにや。」と申しけれ  
ば、一座の人々この議に同じ、兵糧、秣藁、鹽魚に至るまで積置  
き、篝火を焚きて夜廻す。義胤が士ども、政宗が餘りに靜まり  
かへりたる體こそ心にくけれ。いざ試みん。」とて、夜更けて後、



馬二匹とり放ち、人々走り散りて、以ての外に騒ぎの、しる。政宗、小童一人に燭持たせ、白き小袖を上のうち掛け、左の手に刀を提げて立出で、相馬殿の御人や候。といふ。これに候。とて行き伺へば、物音高く候。政宗が下人ばら狼藉候はんには、よく靜めて給はり候へ。とて、また内にぞ入りたりける。

巳の時

夜明けけれども立ちもやらず。巳の時ばかりになりて、義胤の許に使用して一禮し、さて靜めて馬を打つて行く。窃かに人をつけて窺はしむるに、かの國の境駒が峰のあなたに、伊達家の軍兵雲霞の如く充ち満ちて出迎へぬ。

かくて關ヶ原の事終りて、相馬すでに上杉に心合はせられたれば、亡ぶべきにきまる。政宗訴へ申されしは、相馬は年頃政

(一)石田三成。

宗が敵なり、石田、上杉に與したるが一定ならんには、政宗彼が爲に討たれしなるべし。然るに君の仰承りて馳下る由を聞いて、深き恨を忘れ、新恩を施しき。彼が逆謀にあらざるの證に候はずや、また累代の弓箭の家永く斷たれんこと、不便の至なり。と、たびたび歎き申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけりとぞ聞えし。

—常山紀談—

一二 金剛山の景勝

菊池 幽芳

一 萬物相

温井里(三)から二里弱の道に三時間餘を費して、私たちは漸く萬物相下になどり着いた。そこに金剛山中唯一の萬相亭

(二)朝鮮江原道の山。大白山脈に屬し内外の二つに分れてゐる。勝景を以て名高い。

(三)外金剛にある。



Cider.

と稱する茶店がある。煎りつくやうな咽喉の乾きを、氷のやうな山水につけたサイダー(一)に潤ほしたその美味、誠に譬へるものもないほどであつた。私たちはここでゆるゆる辨當をつかつた後、茶店の主人を案内者として、新萬物相へと志した。

新萬物相へは、道と

名づけるほどのものはない。萬相亭を左に見た溪谷から、溪中の石を踏んで上るのである。密林に裾づけられた奇嶽が、



萬物相

溪谷の左右に亂立してゐるので、危い足下を踏みしめては、仰視しなければならなかつた。

七八町上ると、新萬物相の入口である。ここは金剛杖も役に立たない。頂上まで手と足とで登るのである。五葉松や、樅や、檜の下生の灌木の枝や、岩角を手がかりに攀ぢる。時には案内者の肩が足場となつた。

とかくして私たちは小さい岩臺の上に出た。臺は怪獸が天に咆哮するやうな形の大岩壁の側にあるのだ。玉女峰の名に呼ばれる新萬物相の峰頭は、ここから指を並べたやうに手近に仰がれる。もう殆ど大きな樹木はない。何百年経つても育ち得ないひねた赤松や石楠木(一)を見るばかりか、ライ

咆哮す

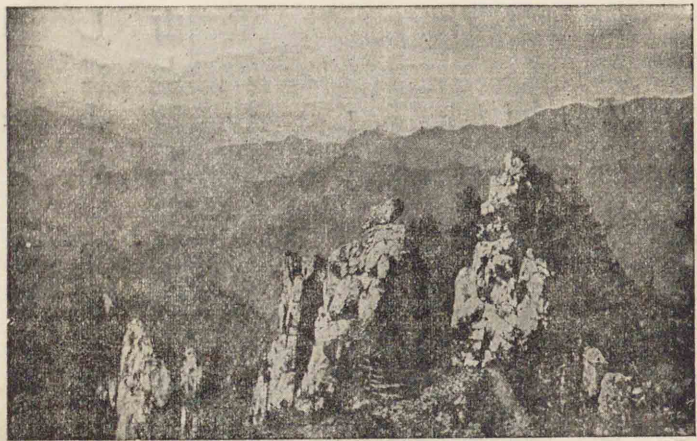
Lilac.  
むらさきはしどひ。





ラツクの花がそこに咲き、空木が濃い桃色の花をつけ、  
 姫菖蒲が絶頂近い岩根に可憐な色を見せてゐた。  
 私たちは遂に金剛門の下に達した。それは自然の大石門  
 で、青い空がくつきりとそこから窺はれる。石門を潜ると、天  
 地は洞然と開いて、千山萬嶽が我に朝宗するの趣を呈する。  
 見上げる石門の右壁に「金剛第一關」の大文字の刻みつけら  
 れてあるのが、いかにもこの大景にふさはしい。今この第一  
 關を踏み得た快さは、言葉につくせぬ喜となつた。が、私たち  
 の頭上には玉女峰が聳えてゐる。その絶頂を極めなければ、  
 かの玉女が化粧水をたゝへたといふ自然の石壺は窺はれ  
 ないのである。石壺は三つ並んで、そこに神秘の靈水を満た

凱歌を奏す



望 軍 臺

してゐるのだ。  
 身を横にして懸崖の上を渡ら  
 ねばならぬ所がある。跨ぎ得ない  
 深い岩の隙間を、身をないものに  
 して飛越えねばならぬ嶮難があ  
 る。全くの命がけであつたが、幸に  
 私は無事にこの難所を過ぎて、海  
 抜三千五百尺の玉女峰の絶巔に  
 立つた。一種の恐怖によつて色づ  
 けられた痛快さに、私は凱歌を奏  
 したものの、足は戦々として慄へてゐる。しかも眼前に展開



百千の媚を呈す

する大觀の怪奇は、この大觀を記すには、私の筆は餘りに小さい。峰の周圍は劔のやうな奇峰が圍繞して、百千の媚を呈してゐる。或ものは見上げ、或ものは肩を並べ、或ものは山と山との間から僅かにのぞく。かくて遠山近峰が波濤の如く重疊し、狂瀾の如く空に湧立つ雄渾、絶大な光景は、たゞたゞ黙して目を見はるより外はない。

俯瞰す

玉女が新粧の水をたゞへたといふ三個の石壺は、峰頂の岩を抱いて僅かに俯瞰すると、直下百尺の平滑な岩面に順序よく並列して、神斧の妙を思はしめる。この自然の奇工に傳説の伴なふのも、決して偶然ではない。

神斧の妙

下つて萬物相を過ぎて、金剛山中の最も趣ある温井嶺越

明媚

幽邃

の路をたどつた。檜や、赤松や、楓が大密林を作つてゐるので、歩々石徑を踏んでその間を行く爽快さと、顧て木の間から遙かに日本海を望む風光の



玉女峰

明媚さとは、全く今までの威壓的な景色に引きかへて、實に忘れ難い親みを覚えしめる。

二 水簾洞

外金剛の雄を萬物相とすれば、内金剛の代表的溪谷は萬瀑洞であるといふに躊躇しないが、密林に蔽はれた最も幽邃な溪谷としては、まづ靈源洞を挙げなければならぬ。別



極致

して望軍臺から水簾洞の邊に達する二三十町の間は、眞に幽邃の極致である。

この峽谷には、山頂から轉落した二丈三丈の巨岩が累々として横たはり、それを受けてゐる地盤も、流水の削磨作用によつて鏡のやうに磨き上げられた花崗岩盤である。急湍はその岩盤の上を音もなく滑つたり、岩塊に遮られて激したり潜つたり、或は飛瀑となり、或は深潭となつて、千百の水の美觀を構成する。しかもその上は常に鬱蒼たる老樹に蔽はれてゐるので、そこに幽邃で神秘的な色彩が多分に加味されてゐる。時には陰濕な溪谷を好む山木蓮が、水に臨んで大きな純白の花をつけ、谷中にその香を満たしてゐる。この花

神秘

えならぬ

は一輪を手にすると、強烈な香が堪へられぬほど嗅覺を刺戟するが、それが梢に咲いてゐると、えならぬ香氣を全谷に漂はせる。幽徑に人影もなく、たゞ水聲禽語のみを聞く時、いづこともなく薫つてくるこの木蓮の妙なる香氣が、この谷に與へる靜寂の感じは、その境を踏まぬものの想像し得ないところであらう。

私たちは溪流を離れては密林に入り、密林からまた溪流を横ぎりながら進むのだ。林は多く樅や、檜や、楓や、朝鮮松で、嘗て斧斤の禍を知らぬものである。下草には躑躅や大きな羊齒があり、多くは朽木や枯葉に埋れてゐる中を、僅かに山僧の通ふ細徑が、おぼつかなくも通じてゐる。往々日の目を



漏らさぬ所があつて、太い葛蘿が大蛇のやうに垂れ、何百年の老木が自然に朽ちてゐるなど、さながら原始的風光で、踏んで行く落葉や枯葉の音にも、自然の私語を聴く心地がある。

この邊にはまた縞栗鼠が多く、不意の侵入者に驚きながら半身を起して、木の枝や岩角の陰から、じつと私たちを見まもつてゐる。杜鵑も時々谷を掠めて鳴過ぎ、山鳩の遠音もほろほろと聞かれた。

水簾洞まではよほどの上りで、しかも可なりの難所を越えなければならぬ。しかし、そこまで行き着くと、誰でも思はず行手に展開する美觀に見とれずにはゐられない。そこに

は二百尺ほどの長さで、約四十度の傾斜をなして居る白色の艶々しい花崗岩が、溪一杯の一枚岩となつてゐて、その上を浅い水晶のやうな水が、四五尺の幅に、波頭のやうな波紋を描きながら、音もなく押擴つて滑つてゐる。水簾の名がいかにもふさはしく、さながら造化の手が永遠に小止みなくそれを繰出してゐるやうに見える。この水は廂のやうに突出てゐる大きな岩の下に流れこむので、上部の落口には、徑三尺、深さ六尺ほどの規則正しい壺の形をした自然の穴が穿たれてゐる。一度そこに落ちこんだ水が、渦巻きながら流れ出るのも一奇觀で、殊に楓の枝がおもしろくその上に差掛つてゐるなど、いかにも佳い構圖で、この瀧に繪のやうな



感じを與へる。

— 金剛山探勝記 —

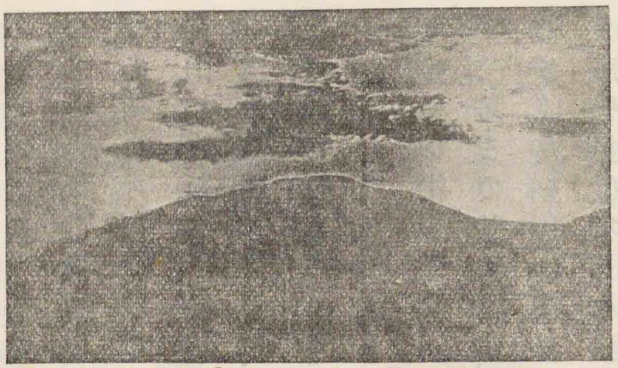
山上の鐘 [自修文]

前田 夕暮<sup>(一)</sup>

(一) 歌人。名は洋造。神奈川縣の人。  
(二) 神奈川縣(相模國)中郡。

水無月  
六月。

郷里に歸る毎に登りたいと思つてゐた弘法山に、けふこそ登つて見ようといふ強い念が湧いた。  
晝飯を済ました私は、弟たちと家を空にして出かけた。裏の竹藪の中の坂を登りきると、すぐに麥畑と煙草畑とになつてゐる。地勢が一體に大きな丘めいてゐるので、畦道は段々畑の間をうねつて、私たちを自然に山の方へ導いてくれる。二ヶ月前に植付けられた煙草は、今や十分に根を張り、思ふままに空に向かつてその廣い葉を擴げてゐる。海の方から來た南風がさつと青い波をたてては、隣に刈殘された大麥畑や、まだ青みのまじつてゐる小麥畑などを、わたつて、高畦の斜面に白くほゞけてゐる茅花を、猫の毛のやうに白く光らせ、更に段々畑を上へ上へと吹上げて、やがて遠い水無月



弘法山の夕日

の空へ消えて行くのである。その風には、すかんぼの酸味や、野茨の花の香や、草の葉の匂や、野に働く農夫の汗の香も混つてゐる。私たちの踏む大地の匂も……故郷の山河と日光とのすべての香氣を含んだ風に吹かれて、山に急ぐ私たちの幸福をしみじみと感じた。  
ちやうど山の登口に着いた時、上の方から懐かしい鐘の音が、全山の緑樹の中を響いてくる。その鐘の音は、私たちの登つて行く山上の鐘樓から撞出されるのである。  
私たちは暫くして青葉の木立の中に入つてゐた。眼に入るのは、櫟、栗、檜、朴、檜、杉、松などの若木で、中でも松の新芽が五六寸伸びて、いづれも空を指してゐるのが心地よい。杉は靜かに光つてゐる。檜はみづみづしい青葉

山上の鐘 (自修文)



(一) 第一百十四代中  
御門天皇在位  
中の年號

(二) 神奈川縣(相  
模國)愛甲郡  
海抜一五七〇  
米  
(三) 同足柄上郡

を風に戦がせてゐる。栗はその寂しい花を白く地に落してゐる。路は漸く峻しくなつた。皆はもう黙つて、たゞ地を見つめて歩いてゐる。路上にはところどころ野茨の花が白く散つてゐる。耳を澄ますと、青葉の葉摺の中に谷川の響も聞える。道は幾うねりかうねつて、私たちを鐘樓のすぐ下に導いてくれるのだ。八月頃來たなら、全山に山百合の花が白く揺れてゐることだらうにと、私は思つた。三十分ほどすると、私たちはもうその鐘樓のそばに立つて、大きな古鐘を眺めてゐた。享保何年何月和泉作<sup>(一)</sup>としてある。享保といふと今から二百年ほど前である。その頃からこの山に吊られて、私たちの村に絶えず懐かしい響を送つてくれてゐたのだ。

一體この弘法山は、高さは六七百尺しかないが、山上の展望の美しさは、人をして驚喜せしめるほどだ。相模平野の西方に位置し、北に丹澤玄倉<sup>(二)</sup>の山々、西に足柄箱根の連山、更に西南の方伊豆の天城までが展望の中にあるし、富士は指先が届きさう。南は一面の村落

(一) 熱海の東南海中約三里に在る  
(二) 茨城縣(常陸國)筑波郡。故山階宮の建てられた測候所及び筑波神社が山上に在る  
**廣袤**  
ひろびろ

(三) 相模國大山の別稱  
**簡素**  
飾りけのないさつぱりとした。

を隔てて、伊豆、相模の海が青く、初島<sup>(一)</sup>を始め、大島その他二三の島が十七八海里彼方に見える。東は遙かに展開された相模武藏の平原の向ふに、秋ならば筑波<sup>(二)</sup>が濃紫色に浮かんでゐる。廣袤<sup>(三)</sup>幾十里にわたる平野の緑の中に、阿夫利山<sup>(三)</sup>の一支脈たるこの弘法山は、さながら野馬がたてがみをたてたやうな姿で、野に臨んでゐる。

しかし、私をして三十何年の間、一日でもこの山を忘れしめぬものは、その眺望よりも、寧ろ追憶の中心となる山上のこの鐘である。懸崖<sup>(三)</sup>の邊に立てられた四本柱の簡素な鐘樓の中に、二百餘年の間靜かに懸り、爽かに澄んだ響を送つて、村人の心に平和を傳へてゐる。この鐘の音は、いかに少年時代の自分にいろいな空想を興へてくれたことであらう。村人にしても、二百年の前からこの鐘の音を合圖に起き、眠り、働き、そして休息して來たのだ。それからまたこの山の興味あることは、村に來て足をとめた諸國の旅人が、山に登つて鐘を撞いてゐたことであつた。私の少年時代には、よくこの山



六部  
法華修業のた  
め厨子を負ひ  
鉦を鳴らし  
諸國を巡行す  
るもの

祝福す  
いはふ  
連枷  
五六尺許の  
尺の端に別  
尺許の太い  
棒をくろく  
著け、これを  
振廻して、  
叩くもの

に登つたものだ。そして八十何歳になるといふ紀の國の老婆と、中國邊の老婆とが、ここに棲んで鐘を撞いてゐたのを記憶してゐる。大きな白猫もゐた。また六部あがりらしい五十くらゐの、日に焼けた額の奥に、小さい眼玉の光つた爺さんのゐたのも覚えてゐる。さりながら、時は新しい時代に向かつて流れて止まなかつた。私が東京に來てゐる中に、それ等の人は皆行く所へ行つてしまつた。私たちが久しぶりで登つた時に鐘撞の家から出て來たのは、それ等の老婆や六部ではなしに、一人の若い女房であつた。それは従弟の隣の家の娘で、一人の我が子を守つて、この山上の庵室に籠つて鐘を撞いてゐるのであつた。まだうら若い夫婦と子との、寂しい、しかし幸福であるべき生涯を、私は祝福したいやうな心持になつた。麓の村からであらう、單調な麥打の連枷の音が鈍い調子をとつて、遠く山上まで響いてくる。耳を澄ますと、うら悲しい麥打唄も聞えるやうな氣持がする。廣い庭に筵を何枚も敷合はせ、その上に麥

の穂を一面に散らして、それをとんとんと連枷で打つ男女の群の、圓い輪が見えるやうだ。その男女の輪が、緩い調子で靜かに右から左に、或は左から右に、熟麥を散らした筵のめぐりをめぐつてゐる。皆の額から汗が流れてゐる。その中の一人が、疲れたうら寂しい聲で麥打唄を歌ひだすと、あとのものも聲を合はせる。そして輪が一回りぐるりと廻る。そこへこの弘法山の鐘の音が夕べの安息の時を知らせる爲に、藁屋根ごしに彼等の輪の中に懐かしく落ちて行くのであらう。その鐘の音を聞くと、皆麥を打終へて、ほつとして鐘の音のする山の方を眺めるに違ひない。

私の想像はそれからそれへと、果しもなく續くのであつた。

—緑草心理—

### 一三 春の水

水つきをするとは見えぬ春の水。

(一)前田夕暮の隨筆集。大正十四年東京アルス發行



よつびいてひやうと放たぬ葉山子かな。  
 武者一人叱られてある土用干。  
 轉寢の顔へ一冊屋根に葺き。  
 本降りになつて出て行く雨やどり。  
 孝行のしたい時分に親はなし。  
 わらんちを穿くと二足踏んで見る。  
 笑うたもあとからこけるすべり道。  
 大佛は見るものにして尊ます。

一四 桶狭間の戦 その一 遠山信春

織田上總介信長公、清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海(一)に出向かひて無二(二)に今川と一戦を遂ぐべし(三)と仰せらる。林(四)

(一)尾張國四春日井郡清洲町。  
 (二)同愛知郡。  
 (三)今川義元。  
 (四)林通勝。

對揚す

切所

承引

(一)永祿三年。  
 (二)知多郡、桶狭間の西北一里半。  
 (三)知多郡。  
 (四)佐久間盛重。

猿樂

佐渡守等敵は四萬に及ぶ大軍なり。身方三千の御人數にて、平場の御合戦對揚すべきことにあらず。たゞこの城に立籠らせ給ひて、敵を切所に引請けて戦はせられ候ふべし。と諫め申し上げけれども、この儀少しも御承引なし。  
 さるほどに五月十八日の夜に入りて、敵はや大高(一)に參着の由、丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申し上げけり。信長公諸家老を集められしに、軍の評定はこれなくして、たゞ世上の御雑談にて御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅城門の曲舞をなし、兵の交頼ある中の酒宴かな。と謠ひければ、殊の外御感ありて、黄金を下され、すでに夜も深更に及べり、各宿所に歸りて、したくあるべし。とて出されけり。家老の面



智慧の鏡も曇る

面歸りながらつぶやきけるは、日頃は良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん、さしたる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。と言合ひて歸りけり。

注進(一)知多郡鷺津町

かくてその夜の明くるを待たせ給ひけるが夜すでに明方のことなるに、鷺津の城より注進あり、敵たゞ今鷺津丸根両城へ人數を取掛け候、と追々申し來る。信長少しも騒ぎ給はず、敦盛の舞の、人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一たび生を受け、滅せぬもののあるべきか。といふ所を繰返し舞はせ給ひて、されば螺を吹立て、具足おこせよ。と仰せられければ、小姓衆乃ち御鎧を奉る。靜かに御物の具を召固め、立ちながら御食を三杯まゐり、御胃の緒をしめられ、

物の具

内(一)今名古屋市の  
(二)名古屋市熱田町。官幣大社熱田神宮。

擁護す

太く逞しき栗毛の駒に召されつ、閑々と御出馬なり。御供の小姓衆、御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等主従六騎、その外雑兵二百餘人、熱田(一)まで三里の間を一



織田信長

時に驅附(二)けらる。熱田大明神の旗屋口に着かせ給へば、諸勢方々より馳参じて、はや千騎許になりぬ。乃ち當社大明神へ御参詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。とて、諸勢をいさめて進まれけり。



(一)熱田神宮の門前約半町、俗に智慧の文殊といふ。

辰の刻

(二)愛知郡呼羅の南。

採みに採む

(三)知多郡有松町。

勢ぞろひ

披露

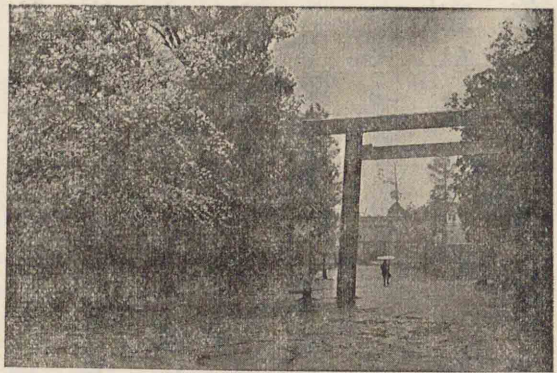
(一)源大夫の宮の前より東を御覽するに、丸根山、鷺津山両城共に落城と見え、黒烟雲に連なりて夥しければ、少しも早く驅附けたく思し召す。濱手よりは近道なるに、それさへけさは満潮差入りて、馬の通ひもかなひ難し。その日の辰の刻に、やうやう熱田より笠寺(二)の東、上道の細繩手を採みに採んで驅けさせられ、道々の砦の人数を召集め、やがて善照寺(三)の東の狭間にて勢ぞろひありけるに、漸く三千許なりけれども、五千の人数とぞ披露ありける。

さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道へ遣過して、當方の人数はひそかに山の陰を廻り行きて、義元の本陣へ一度にどつと突掛り、切崩さんとの結構なり。義元これ

(一)知多郡有松町に屬する。勝田は其の東北の、樂狭間である。

(二)佐々政次、政の兄。  
(三)千秋秀忠。

をば知らず、桶狭間の山下の芝原に敷皮敷かせ、先手のもの



熱田神宮

どもが鷺津、丸根の両城を攻落せしを、大いに悦び勇み誇りけるところへ、近郷の寺社の僧、社人等、悦の樽を進上しければ、乃ちそれにて酒宴を始め、謠をうたひ興に入る。熱田表には織田方の先陣、佐々隼人、千秋四郎等、人数二百許にて、信長公の御旗を待受け、山際に控へるたる駿河勢へ

打つて掛る。佐々、千秋小勢なれば取圍まれて、五十餘人討取られ、駿河勢誇りて、隼人、四郎兩將の首を取りて、槍の先に差





天魔波旬

上げて、一度にどつと鬨を作る。しかのみならず、信長公の寵臣岩室長門守も、拔驅して討取られぬ。佐々、千秋、岩室三人の首を本陣に遣し、義元に見せ奉れば、義元愈勇み誇りて、某が鋒先には、いかなる天魔波旬なりともたまるまじ」と宣ひて、なほ勝軍に驕を極め、酒宴に耽りてゐ給ひけり。

一五 桶狭間の戦 その二

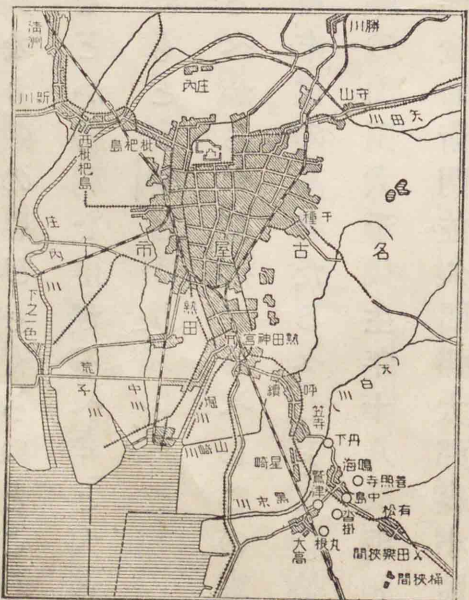
さても信長公は、これより中島へ移りて合戦を始めんと宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田權六等御轡に取附きて、ここは両方深田の中、一騎打の細道なり。これを通り過ぎ給はば、無勢の様體、敵方よ

(一)桶狭間の西北  
(二)池田信輝  
政の父。  
(三)毛利秀高。  
(四)柴田勝家。  
一騎打

勿體なし

無理無體

りさだかに見透かしはへるべし。その上勝をあせりて、威勢強き敵の中へこの小勢にて向かはれんこと、勿體なき次第なり。たゞ切所に待受けて御合戦候ふべし」と各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島へ移らせ給ひ、中島よりまた討出でんとし給ふを、なほもかの面々面聲々に止め申しけり。



その時信長公人々を顧て、凡そ合戦の習は、勢の多少によるべからず、殊更この敵はきのふは大高城へ兵糧を入れ、ま



新手  
思ひ切る

安堵す

たけさは驚津丸根両城の合戦に精をつくし、辛苦艱難して、  
疲れはてたる人數なれば、大勢といふとも、猛からず。此方は  
新手にて、思ひ切りたる軍兵なり。敵の思ひも寄らぬところ  
へ、無二に掛つて突崩さば、なか勝利を得ざるべき。と大音  
聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

(一)前田利家、

さて、けふの合戦は、首取るべからず、打捨なるべし。この軍  
場へ出づるものは、家の面目、末代の高名たるべし。とて、諸勢  
をいさめて掛り給ふに、先驅の前田犬千代生年十八歳、毛利  
河内、森十助、木下雅樂助、中河金右衛門、佐久間彌太郎、森小助、  
安倉彌太郎、魚住隼人等、高名して、手に手に首を持來る。信長  
公御感ありて、皆々旗を巻き、忍びやかに山際まで押附け、敵

下知す

(一)築田政綱、

勢の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ。と下知し  
給ふ。築田出羽守申し上ぐるは、敵はけさ驚津丸根両城を攻  
めしより、未だ備を變ふべからず。この分にてかゝり給はゞ、  
敵の後陣は先陣たるべし。たゞ今この口より突掛り、差向か  
はせ給ふならば、必ず大將義元を討取るべし。と申しければ、  
さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

(二)愛知郡、

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く、敵の顔へ風吹  
きかく。敵の爲には向風、身方は後より吹く風なり。餘りに強  
き風雨にて、沓掛の山の上に生ひたる二がい三がいの松の  
木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これたゞ事にあらず、熱  
田大明神の神軍か神風かなんといふほどなれば、身方の



(一)森可成、蘭丸の父。

裏切算を亂す

大勢廻りくる物音少しも敵に聞えず。やがて雨の晴間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、掛れ、掛れ。」と大音あげて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、身方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。ただこのまゝ、馬を入れて、乗崩し給へ。」といふを、尤もなり。とて、毛利新助、林佐渡守、織田造酒丞、築田出羽守、中條なかでう小市郎、遠山甚太郎、同河内守等、大將にうち續いて一度に馬をどつと入れ、その勢勇みに勇んで、黒煙を立てて驅破れば、敵陣思ひも寄らぬところへ俄に掛られ、心ならず後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒いで、「喧嘩か。」といふものもあり。謀叛か、裏切か。」と思ふもあり。取捨てたる弓、槍、鐵砲、旗、指物は算を

亂すに異ならず。中にも義元の乗り給ひし塗輿を捨置きたり。信長公これを御覽じ、「敵の旗本疑なし。愈追ひつめよ。」とて、同未の刻、東へ向いて追掛け給ふ。

初は敵三百許義元を圍んで退きけるを、手しげく追附けらるゝにより、二三度四五度取つて返し討死して、次第次第にまばらになり、後にはやうやう五十騎許取つて返して戦ふところを、信長を始めとして、皆々馬より下立ちて、若武者互に先を争ひ、しのぎを削り、鐔を破りて、切先より火焰を出し、散々に戦ひけるほどに、手負死人は數を知らず。今川義元は無雙の勇者にて、なほこれまでも騒がず、諸勢を下知し居給ふところを、織田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義

しのぎを削り鐔を破る

(一)服部忠次。



したゝかも

元太刀を抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻居に切附けられて、起上ることかなひ難し。毛利新助來りて、透間なく切つて掛り、義元の首を取らんとす。義元組伏せられては、や刀にて切ることかなひ給はず。新助が人差指にかつばと囁付き、終にその指を食切り給ふ。新助元よりしたゝかなるものなりければ、指を食切られながら、押附け押附け義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。

なじかはた  
まるべき

残る敵どもなじかは少しもたまるべき。總軍一度に敗北して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる身方をも、敵の追ふよと見損じて逃散るところを、ここに押しつめ、かしこに追ひつめ、思ふまゝに討取りけり。抑、この桶狭間といふ所は、山

申の刻

の狭間、深田の邊にて、高み卑みうち茂り、足場いづれも切所なれば、逃行くものども一入に逆方を失ひ、悉く討取られぬ。身方の若者ども追附き追附き、首二つ三つ、討取り、御前へ参りける。を、餘の首は清洲にて御實檢あるべしとて、義元の首ばかりを御一覽成され、御馬の先にその首を持たせ、勝鬨を作つて、その日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり、首帳を記されけるに、二千五百とぞ聞えける。これよりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。

— 總見記 —

一六 きらめく稻妻

中村 秋香

はたゝ神

天地に轟くはたゝ神

篠を束ねて降る雨を、



決河破竹の勢

神の祐と岨づたひ、  
衝を包み草摺まきて、  
攻入る必死の三千騎。

沓掛大高笠寺の

野にも山にも充ち満ちたる

四萬五千の駿河の軍勢、

あすは清洲を攻落し、

決河破竹の勢にて

尾張の國を定めんと、  
河の先と割り入れんと下まわ勢よとすけり

心おごりの酒うたげ。

傍若無人

饗宴

松竹願

詞子

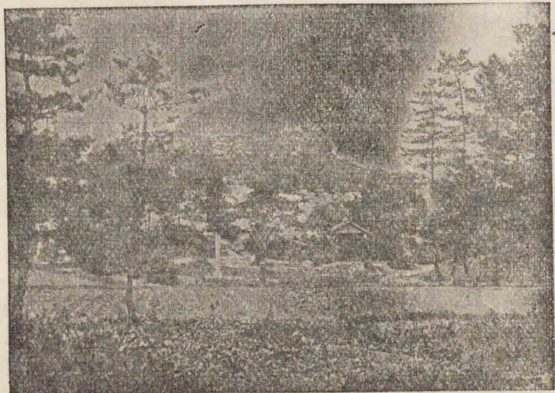
「松の嵐は琴のしらべ、

非常にすましくして  
けやしき勢

玉の緒

鳴神のおとは鼓のひびき、  
外に心地よきうたげや」と、  
佩きつる太刀の緒うち解けて、  
歌ひつ舞ひつ、もろとも  
興たけなはなるをりしもあれ、  
四面に起る鬨の聲。

すは敵ぞといはせもあへず、  
雨よりしげき寄手の槍先、  
嵐をしまく敵の太刀風。  
天忽ち覆り地見る見る裂け、  
きらめく稲妻光のひまに、  
二千餘人の玉の緒は、



桶狭間戰場址



草葉の露と消えにけり。

あゝ、定めなき人の世や、

あゝ、頼まれぬ人の身や、

さもいかめしく轟きし

名はときの間のはたゝ神。

夢の名残の松風も、

昔のあとやたづぬらん、

五月雨寒き桶狭間。

—新體詩歌集—

飛行機がとぶ [自修文]

久米正雄

鎌倉海岸通には山階宮様の別邸がある。傳へ聞くところによると、この「飛行機」の宮様の御別邸があるので、程遠からぬ追濱からの海軍飛行機といふ飛行機は、鎌倉の空を翔過する毎に、宮様に敬意

(一)山階宮武蔵王。  
(二)横須賀市の北方郊外。

(一)名は好敏。今少佐。

ゆくりなくも  
何といふわけ  
もなしに。

統  
一種の絹布。  
おにも繪を描  
くに用ひる。

を表する爲、海岸通の中空で一旋回ぐるりと廻つて、そして爆音高らかに目ざす方向を取るといふ。さういつたやうなわけで、鎌倉は割に飛行機の訪問に恵まれてゐる。  
僕は曾て、飛行機の爆音を決して喧しい、若しくはうるさいと聞いたことがない。そして飛行機を見ることは、昔徳川大尉だつたか誰だつたかが、代々木で始めて飛んだのを見た高等學校生徒時代以來、可なり好きである。それは、或は私のやうなもの身體の奥まで、潜かに浸入してゐる軍國思想の遺傳的血が、ゆくりなくも呼醒されるのか、或は何とはなしに子供めいた心になつて、空をうち仰ぐのが氣分を愉快にするのか、爆音の昂揚につれて、何となく「バンザイ」といつて見たいやうな氣持を、いまだに時々起すのである。それは、毎日鬱陶しい天氣が續いた後、漸く空が薄ぼんやりながら晴上つて、鎌倉の夏がやつて來たと思はせるやうな日だつた。雲は高く、薄く、統のやうに、ところどころ梳きざれがしたまゝ、空を包

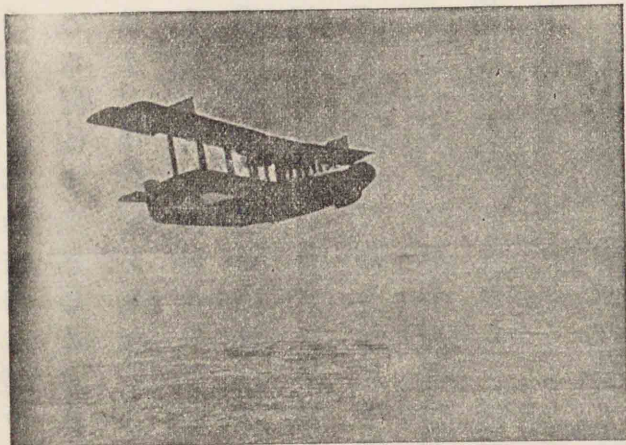


低徊  
あるきまはる  
うろつきまは  
る。

露臺  
屋根に設けた  
運動場。バル  
コニー。  
(Film.)  
大儀  
気分がすま  
ない。

んで、太陽が形を見せないで、在所<sup>あちか</sup>だけを明るく見せてゐた。  
午前十時頃だつた。僕はつい四五日前移つて来たばかりの避暑  
宿の落着<sup>おちつき</sup>のない気分で、ぼんやり柱に背をよせたまゝ坐つてゐる  
と、遠くから近づいてくる顫<sup>ふる</sup>へがちな飛行機の爆音を聞いた。と、そ  
れは益、近づいて来て、どうやら頭上を低徊してゐるらしい。  
「は、あ飛行機の奴、また宮様に敬意を表し始めたな。」  
すぐ僕はさう思つた。そしてその瞬間、白い海軍服を着た宮様が、  
何故か白い服が聯想された。——御別邸の露臺<sup>だ</sup>で、望遠鏡を中  
空に向けながら、近侍の人々に何か説明してゐられる光景が、フイ  
ルムとなつて心に映つた。が、何となく大儀<sup>たいぎ</sup>なので、そんな想像でた  
だ心の中に飛行機の旋回を描きながら、出ても見ないでゐると、爆  
音はなかなか遠ざからないで、しかも時々風の加減が、激しくなつ  
たり、突然なくなつたりする。  
「變<sup>か</sup>だな。」と思つて、僕は縁側へ出て、宮邸の上空あたりを仰ぎ見た。

味をやる  
氣のきいたこ  
とをする



水上飛行機の飛翔

と、果して、宮邸の眞上あたりに、——事實はさうではなかつたかも  
知れぬが、——一機が鉛色の翼を擴  
げて、方向を變へつゝあつた。  
と見る間に、その薄雲の高い空の  
中で、爆音を一際<sup>ひときは</sup>高く響かせたと思  
ふと、機はぐいといふやうに横にな  
つて、おや、落ちたなと思ふ間もなく、  
落着き拂つた態度でだんだん逆様  
になりながら、ぐるりと環を描き始  
めた。落ちたんでないなと思つたす  
ぐ後には、おや、あれが横轉<sup>わうてん</sup>といふの  
だな。これはおもしろいぞ。なかなか  
けふの敬意は念入で、味<sup>あじ</sup>をやるなと思つたので、瞬<sup>またき</sup>もせず見てゐた。  
すると、その飛行機は續けざまに、ぐるりと三四回見事に



横倒しになると、逆轉してはまた元へ戻り、またぐるりぐるりと、機翼を薄光りさせながら、宙返を續ける。そして少し高度が低くなる。と、當りまへの姿勢に歸つて、暫く上昇する間は休んでゐるが、見てゐる間に、すぐまた爆音を妙に響かせて、ぐるりぐるりを始める。初はまたするぜ、ぐるり……おやもう一度か、ぐるり……といったやうに、おもしろがつて見てゐたが、何だかそれを何回となく——無慮十二三回は續けたらう——續けてゐるうちに、何だか妙に胸騒がして、危険なやうな感じで、こちらが苦しくなつて來た。もうよしてくれ。そして落ちない中に歸つてくれ。さう願はずにはゐられないやうな氣持になつて來た。それなのにまだ性懲もなく、その飛行機は薄曇のした、そして薄光の漲つてゐる空で、ぐるりぐるりを續けてゐる。

が、しかし、その飛行術の鮮かさは、我々が素人目には、全く驚嘆に値してゐた。さても自信のあるものか、命知らずだ。ひよつとすると、

手に汗する  
危く思つてひ  
やひやす。

餘り技術がうま過ぎるから、外國の教師か何か知らんなどと思つて、文字通り手に汗して見ずにはゐられなかつた。

と、やがて、やうやうその機は横轉を止めた。そして私たちのほつとした氣分の中に、すぐ歸るのかと思つてゐると、今度はまた環旋を描いて、高く高く上昇し始めた。は、あ、今度こそもう止めて、高く飛んで歸つて行くつもりだな。さう思つて、なほもその行方を見てゐると、彼は突然、はたと爆音を止めた。そして、おやと思ふ間もなく、機はゆらりと一搖揺れて、機尾を上垂れ下つたと見る間に、薄光を翼に二三度射させながら、ふらり、ふらり、ふらりと落葉のやうに、中空へと錐揉をして下りて來た。そしてそのまゝで、まつすぐ、下に下まで落ちますまいかといふ危惧の中に、またすうつと今度は横に流れると、そのまゝ、忽ち機の陣を當りまへに立て直して、今度は追濱の方面へ、脇目も振らずまつしぐらに一直線を描いて、見る見る小さくなつてしまつた。

まつしぐらに  
いいきさんに  
にいちもくさん



執拗 たいくつ。か  
たいぢ。か  
(一)久米正雄の隨筆集。大正十三年東京新潮社發行

(一)東京市外淀橋町字角筈。東京市の西郊。  
(二)東京市外大久保町。角筈の北隣。

僕はその機が向ふの豆子寄りの丘の彼方へ黒點となつて没するまで、縁側に伸上り伸上り見送つた横轉を續けてゐる間は、随分執拗な飛行家だと思つてゐたが、飛去りぶりのすうつとしてゐるのが非常に引立つて、何となく愉快だつた。  
——微苦笑藝術——

一七 田園雜興

大町 桂月

角筈<sup>(一)</sup>に住みし頃は三兒ありき。大久保<sup>(二)</sup>にて一兒を失ひたるが、今なほ四兒あり。上の三兒は男にして、末の一兒は女なり。われ性、植物を好めど、動物を好むこと更に甚だし。花美なれど、久しくこれに對すれば變化なきに厭く。動物には變化ありて、終日相對して厭かず。されど四兒をもち立つるに手のかゝるを以て、妄りに多く動物を飼はず。鶏を飼ひしが、犬

逍遙す

常に來り襲ひ、その一つ終に犬に奪はれたり。かはいさうに思ひて、飼ふことを止めぬ。小池を掘りて鯉、金魚を飼ふ。われ執筆に倦みて庭に出づる時は、まづ必ずこれに對す。その泳ぐさま何となく趣味あり。されどそれを見て喜ぶ小兒のさまを見れば、なほ一層の趣味を感じず。移り住みてより二三個月の間は、たゞ庭園を逍遙することがおもしろかりしも、慣れては初のやうには珍しう思はず。小兒を連行けば、庭園常に一種の趣味を生ず。小兒の爲に蟬を捕へたり、栗を拾ひたり、また枯木を拾ひたりするにつけて、庭園の逍遙常に愉快なるを覺ゆ。目的のあるところ活動あり。活動あるところ常に新趣味あり。世に生まれて目的のなきものは、終に人生の



趣味を解せざるべきなり。

家庭に小兒あるは、庭園に花あるが如し。四兒もあれば閑をつぶすに餘りあり。なるべく戶外に運動せしめんとて、まづぶらんこ二つ設けぬ。生まれて一年半許に在れる女の兒も兄の眞似して、蕨の如き手に麻繩しかとつかみて運動するを、こよなき樂みとするを見るが、こよなき樂みなる親の心、子もたぬ人は知らざるべし。ひとり逍遙しておもしろきもの見つけては、兒にも見せんとて戻りくることあり。子、庭に出でて久しく戻らざるに、何をなしゐるにかと懐かしくなりて、そここ尋ねまはり、兒の名を呼ぶ聲を、空しく木魂に答へさすすることも屢なり。

こよなき

頑健

暇ある毎に庭園を逍遙するにつけて、樹木のさまを見つくし、蟲を見つくしぬ。枝ぶりのおもしろき木は松、梅、楓、柿、櫻、百日紅などなり。松は庭園につきものなり。種類多く、枝ぶりもさまざまなるが、頑健のやうにて、何となく卑し。梅はあはずれ女の如し。されど花をつくれば憎らしくはあらず。百日紅の枝ぶりは、垢ぬけしたる女のやうなれど、皮の剥ぐるが疵なり。楓は勇肌いさまはだの男の如く、柿は實のみ賞せらるゝものなれど、われその枝ぶりに一種の風情あるを愛す。杉はばか正直の人のやうなるが、多く立並べば莊嚴なり。木の花にては櫻が花主なることいふまでもなし。草花にてはわれ朝顔を愛す。その一朝にして落つること、最もおもしろし。さかり久



しき百日紅は人に厭かるべし。されどその花の色、桃李に優れり。概して花の美なるは實甘からず、實の甘きは花美ならず。たゞ桃李は二つながら併せ得たれど、花は梅櫻に如かず、實は梨柿に如かず。常磐木、四時葉をつくれど、また常に枯葉を落す。木は花をつけたり紅葉したり、兀然として骨立したるものこそよけれ。

兀然

以爲へらく

衣食住の中にてわれ以爲へらく、衣は垢つき居らずして、冬寒からざるだけなれば十分なり。われ他に望なし。食物もからだ相當に滋養を取れば足れり。必ずしも美味あるを望まず。われはたゞ望む、家は壯麗ならざるも、さつぱりして、まはりこみ合はずゆるやかにして、樹木あり眺望あらんこと

を。この望は角筈に住みて稍かなひ、ここに來りて最もかなへり。一生住めばこの上もなけれど、我が所有にあらず、賣物となり居れば、いづれ買ふ人ありて追出されんこと、角筈村に於ける如くなるべし。されど事の終りたる後より見れば、一二年もあつけなければ、十年もあつけなし。一生もまたあつけなし。一日住めば一日の願足り、一年住めば一年の願足る。買ふ人あらんまでは、余にとりては浮世の樂土なり。

一八 山 寺

若 山 牧 水

眼が覺めて見ると、雨戸の隙間が明るくなつてゐる。雨はと思ふと、何の音もせぬ。もう寺の爺さんも起きた頃だと、勝

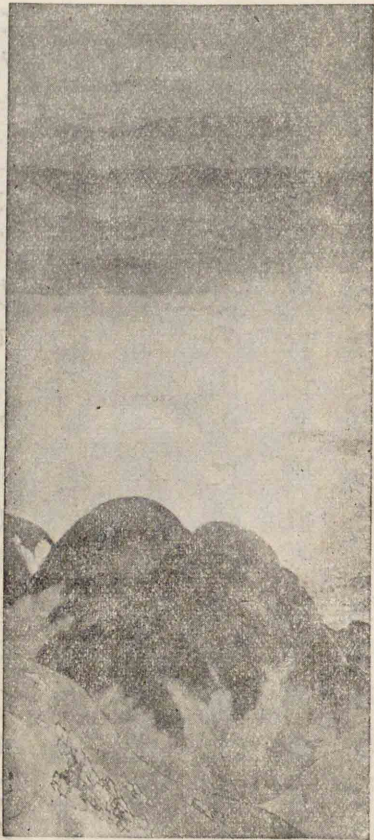


手元の方に耳を澄まして、何の音もせぬ。暫くすると、朗かに啼く鳥の聲が耳に入つて來た。何とまあ、鳥の種類が多いことだらう。あれかこれかと、心あたりの鳥の名を思ひ出して見ても、とても數へきれぬほどの種々な音色が、枕の上に落ちてくる。私は耐へきれなくなつて飛起きた。そして雨戸を引きあげた。

照るともなく曇るともなく、燦りわたつた一面の光である。見上げる杉の木立は、次から次とたゞ靜かに押並んで、見わたす限り微かな風の氣勢もない。それからそれと眼を移してゐた私は、ふと、杉の木立の間に、遙かに光る所を見出した。麓の琵琶湖である。どこからどこまでと、その周圍はわか

らないが、とにかく朧々とその水面の一部が輝いてゐる。

餘りに靜かな眺なので、我を忘れてぼんやりとそこらを見廻してゐ



琵琶湖(川畑春翠筆)

見廻してゐると、また一つのものが目に入つた。眼前からすぐ落ちこん

で行つてゐる窪地。一帶は、ちやうど溪間のやうになつて、僅かの間杉木立がとだえて、細長い雑木林になつてゐるが、その藪の中をのそりのそりと半身を屈めながら、何か探して



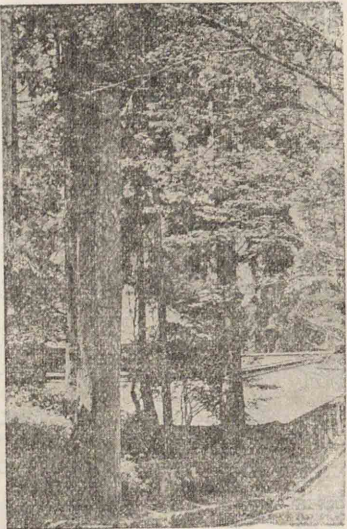
ゐる人がゐるのである。頭を丸々と剃つた大男の、紛らふ方なき寺男の聾爺さんである。それを見ると、妙に私は嬉しくなつて、大聲に呼びかけたが、無論彼は振向かうともしなかつた。後庭に降りて、窺のぞの前で顔を洗つてゐると、爺さんは青靑とした野生の獨活どくわくを提げて歸つて來た。こんなものも、といひながら、筍をも二三本取出して見せた。

この寺は比叡の山中に残つてゐる十六七の古寺の中、最も奥に在つて、また最も廢れた寺であつた。住持もあるにはあるが、麓の寺とかけ持ちで、何か事のある時の外、めつたには登つて來ず、年中殆どこの寺男の爺さんが一人で留守居をしてゐるのである。四方たゞ杉の林があるのみで、しかも

(一)延暦寺の本尊、延暦七年傳教大師の創建。  
(二)傳教大師の廟。  
(三)比叡山の最高峰、高さ八二五米。  
(四)京都府(山城)愛宕郡八瀬村の東。

(五)最澄のこと。近江滋賀の延暦二十一年に勅を奉じて唐に渡り、二十三年弘仁朝した。四年、四十八年、五年、五十六年。

溪間の行きどまりになつた所に在るので、根本中堂だの、淨土院だの、釋迦堂だの、または四明が嶽(四)、元黒谷などへ往來する參詣人たちも殆ど立寄ることなく、まる一週間滞在して



根本中堂

ゐる間、私はこの金聾の爺さんの外、人間の顔といふものを見ることなくして、過してしまつた。

多いのはたゞ鳥の聲である。大正十年が當山開祖傳教大師(五)の一千一十年忌に當つたといふ舊い山、そして五里四方にわたると稱へられる廣い森林、その到る所が殆ど鳥の聲で満ちてゐる。



朝最も早く啼くのが郭公である。くわつくわう。くわつくわう。と啼く。鋭くして澄み、しかもその間に何ともいひ難いさびをもつたこの聲が、山や溪の冷たい肌を刺すやうにして響きわたるのは、大抵午前の四時前後である。この鳥の啼く時、山は全く鳴りを静めてゐる。くわつ。と鋭く高く、さうして直ちに、くわう。と引くその聲が、ほゞ二つか三つ、或場所で續けざまに起つたかと思ふと、もうその次は、違つた或頂上か、溪の深みに移つてゐる、暫くも同じ所に留つてゐない。そして殆どその姿を人に見せたことがない。

杜鵑も朝が多い。これは必ず最も高い梢でなくては啼かぬ。この鳥も二聲か三聲しか聲を續けぬが、どうかすると、取

杜鵑・時鳥  
不如歸・杜宇  
郭公・子規  
まきつり  
しかのたまご  
ほととす  
右まむか、りり

亂して啼きたてることがある。その時は、例の「本尊かけたか」の律も破れて、全く急迫した亂調となつてくる。日のよく照る朝などは、聽いてゐて息苦しくなるのを感じる。この鳥は聲よりも、峰から峰、梢から梢へ飛びわたる時の姿が誠に好い。それから、高調子の聲に混つて、何といふ鳥だか、大きさは燕ほどで、その尾の一尺くらゐ長いのがゐて、細々と、實に細細と息を切らずに啼いてゐるのがある。これは下枝から下枝をわたつて歩いて、時には四五羽、その長い愛らしい尾を連ねてゐるのを見る。

日が闌けて、木深い溪が日の光に煙つたやうに見える時、どこから起つてくるのだから、大きな筒から限りもなく抜け



寄邊ない

だしてくるやうな聲で啼きたてる鳥がゐる。始もなく、終も  
 ない。聽いてゐれば、次第に魂たまを吸取すくられて行くやうに、寄邊よへ  
 ない聲の鳥である。或時は極めて間遠まゝに、或時は釣瓶つづみ打ちうちに  
 烈しく啼く。この鳥も容易に姿を見せぬ。聲に引かれて、どう  
 かして一目見たいものと、幾たびも私は木の罌かみに濡れなが  
 ら、林深く分入つたが、終に見ることができなかつた。筒鳥と  
 いふのがこれである。筒鳥の聲は、極めて間の抜けたもので  
 あるが、それを稍小さく、且つ人間臭におくしたものに呼子鳥と  
 いふのがゐる。初め筒鳥の子鳥が啼いてゐるのかとも思つ  
 たが、よく聞けば、全く異なつてゐる。山鳩にも似、また梟にも  
 近いがそのいづれとも違つた、やはり呼子鳥としての、いひ

難いさびを帯びた聲である。

數へれば際限がない。晴れた朝など、これ等の鳥が殆ど一  
 齊に、そここの溪から峰にかけて啼きたてる。茫然と佇ん  
 で耳を澄ます私は、身體全體の痛みだすやうな感覺に襲は  
 れることが再々あつた。

— 比叡と熊野 —

### 一九 佛の化身

相馬 御風

私は先頃一つのいい傳説を聞いた。それは越後の北蒲原  
 郡の乙村おつむらにある乙寶寺おつほうじといふ古刹こせつに參詣した時であつた。  
 その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その  
 境内に先年特別保護建造物として指定された、たまらなく

古刹こせつ

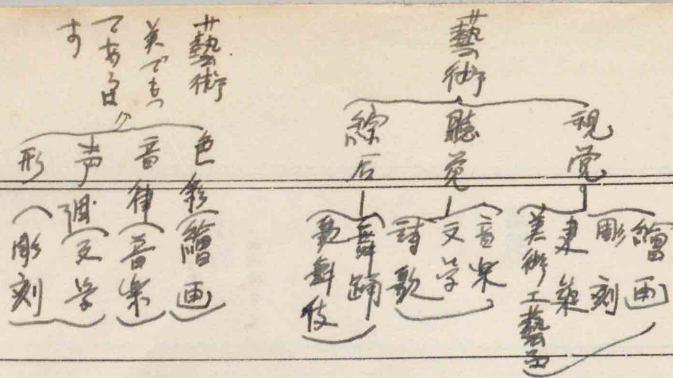


棟梁

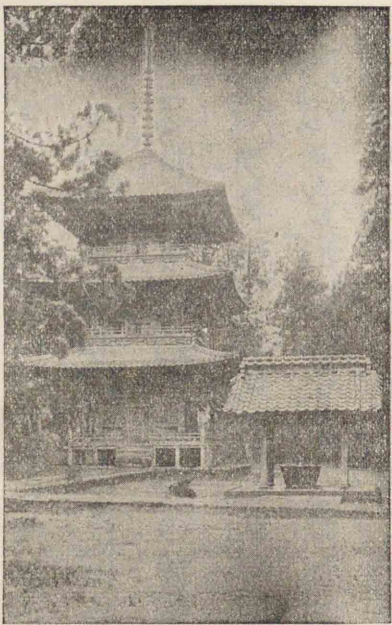
いい形をした三重塔がある。かの傳説はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住人小島吉正である。その塔の建築には、さすがに有名なその棟梁も、心を痛めつくしたといはれてゐる。どう工夫して見ても、うまく行かなかつた。とうとう彼は工事半ばに絶望の極夜逃はてをしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼はたゞ姿を晦ましあはれさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜道をたどつて海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ西へと歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思は



れた。いつそあの暗い波間に飛びこんでしまはうかといふやうな突ゆきまうたきつめた思おもひも、幾たびとなく彼を襲うた。しかし、彼



乙 實寺三車塔

はやはり死ねなかつた。彼はたゞむちやくちやに闇の中を歩くのみであつた。

自分の生命をうちこんで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼にとつては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外よろしりならなかつた。しかも彼はなぜかうしてその場を逃出して來たか。それを反



矛盾 ついでに  
反する

黎明

省する時、彼は我ながらその卑怯を詛はずにはゐられなかつた。自己に對する詛は、やがて自己に對する憎みであつた。けれども彼はその詛ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、なほそこに故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦みは、たゞ徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へるもの歩みに外ならなかつた。

彼の心は底知れず暗かつた。しかし、天地の闇はいつとなしにほのぼのとして、黎明の光に照らされはじめた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果しもなげに續いた廣い砂

濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを増して行つた。明離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりと濡れた砂濱に長く長く續いた彼の足跡、むちやくちやに闇の中を歩いて來た彼自らの足跡——それさへも今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現れた。  
さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかもすつかり忘れはてて、たゞ茫然とその美に酔うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投出したのであつた。

それから幾時過ぎたかわからなかつたが、夢とも現とも



朦朧

なく、彼は耳もと近くに、子供たちの楽しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めたやうに、彼はふらふらと起上つた。と、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻りにやつてゐるのが現れた。何といふわけもなしに、彼はその方へ吸寄せられた。しかし、子供たちは遊に夢中になつてゐるのか、彼の近寄つたことに少しも氣づかなかつた。が、その刹那、その憐な建築師の疲れはてた両眼には、突如として不可思議な輝きが現れた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、たゞしきいへも、生々とした氣持が 充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積重ね積重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。

刹那

彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心をうちこんでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る代る彼等はそれを續けて、着々として或一つの形を組立てつゝあるが、なかなかうまく行かない。積むと崩れる。崩れるとまた積始める。幾度となく失敗し、幾度となく始める。しかも彼等は失望しない。倦まない。止めない。そして遂に或一つの纏つた形ができ上る。すると、彼等は共に手を拍ち、聲をあげて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新たに始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐたかの絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何かを獲得した



やうな確信しかたなしに輝く面もちを以て叫んだ。

「そこだ、その呼吸だ。その組方だ。」

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道へと驅戻つた。

端嚴

さうしたことがあつて、漸くのことのでき上つたのが、今

たがしそやんそかた

日見るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であ

あつかひこころなまこと

るといふのが、傳説のあらましである。しかも傳説は、それに

附加へて、その三人の子供は大日堂の大日、薬師、彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は私たちを子供にかへす。」とパスカルはいつた。私たちは更に「子供は私たちをほんたうの智慧に導く」ともいひ

化身

Blaise Pascal  
フランシスの数  
學者、哲學者  
西暦一六六二  
年十一月六日

附會

得よう。乙寶寺三重塔の傳説は、私にさうした貴い暗示を與へる。子供は佛の化身であつた。といふその傳説の附會をも、私はそのまま、受容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。

權化

二〇 桃源郷伊豆の大島 有島 生馬

大島の自然は寧ろ單調で、貧弱チリチリの感じを免れない。殊に淡

みすぼやしい

水の缺乏と火山灰の地層とが、その感じを深くさせてゐる。

しかし、それ等を補うてなほ餘りあるものは、その氣候のい

いことである。冬でも四五十度を下らないし、夏でも平均九十度には上らない。この海洋氣候のもたらす恩恵が、さまざま

桃源郷

支那の武陵の桃源の郷

境界をはなれた仙境

この世ではなれ左楽園

陶淵明……詩人

吾の桃源原記

吾の太元中の武陵見



霧圍氣

まなことに深く影響して、特殊な霧圍氣を作つてゐるのである、植物にも、人體にも、人事にも。

一例をいへば、あしたば、たがやなどいふ青々した、いかにも旨さうな牧草が一年中繁茂する。そのため大多數の島民は牛を飼ふ。その結果、内地では見馴れないさまざまな構圖が描かれる。或時は農家の裏庭に、或時は山腹の野原に、或時は搾乳場に、晝間はもとより、時としては暗夜に、この優しい目を有する家畜と村人との組合せが見られる。悠長な鳴聲も到る所に聞える。その乳は飲用としては殆ど無代價の有様であるが、<sup>(一)</sup>バター、煉乳原料、乳糖、<sup>(二)</sup>カゼインなどに製せられるから、一日二三圓になる。それによつて婦女子は樂々と獨立

(一)Butter.  
(牛酪)

(二)Casein.



牛 二 種 大

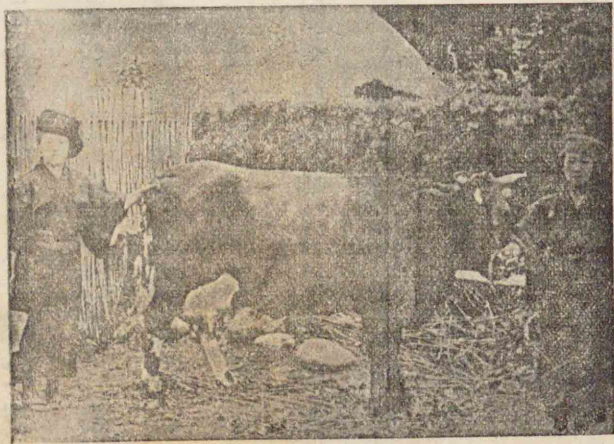
鳥 大



(一) 神奈川県(相模)鎌倉郡鎌倉町  
 (二) 同中郡大磯町  
 (三) 静岡県(伊豆)田方郡熱海町

の生計を営むことができる。

牛の影響はこの外にもある。我々は純良な牛乳を得ると同時に、旨い仔牛の生肉をも十分に供給される。その上、東京からくるパンに新鮮なバターを副へて食ふことができる。まづ食物の有様からいふと、旅客は歐洲の田舎にゐるやうな心持がする。新聞も鎌倉<sup>(一)</sup>、大磯<sup>(二)</sup>、熱海<sup>(三)</sup>邊とは違つて、市内版が届く。私にとつて一番興味を中心になるものは、やはり島民そ



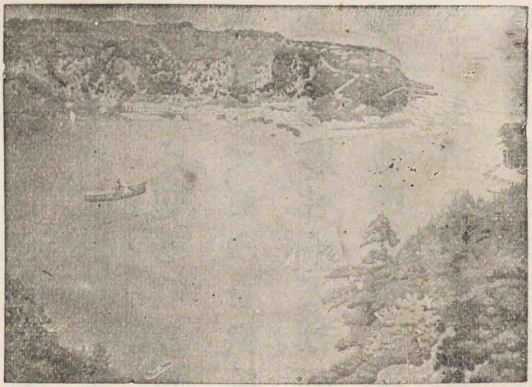
島の風俗



氣稟  
敢爲  
抽象的

のものである。言語、風俗、建築、習慣、生活、産業、社會組織、道德、宗教など、皆一種の特色を有してゐるやうだから、仔細に觀察したら、それぞれおもしろい點があらう。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これ等には最も驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全安定、氣稟は快活、敢爲、そして労働を愛する。こんな抽象的な言葉を並べただけでは明瞭でないが、ともかく、彼等くらゐ樂園の住人に近い人間は他に澤山はなからう。そしてこんな住民をもつてゐること、それが大島の桃源郷たる最大の理由である。

大島が伊豆、相模、安房の沿海に位しながら近年まで全く内地の文化と没交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來



波 浮 港 (筆 茂 村 藤)

たことは、世界に於ける一奇觀といふことができよう。どこかの國のどこに、こんな不思議な現象が見られよう。單に交通が不便だつたといふだけでは、とても説明しきれないほど他とは異なつてゐる。私にはその原因がはつきりわからなかつた。ところが、私が島に行つた時、或古老から次の話を聞いて、略、その原因が明らかになつたやうに思へた。

それは、舊幕時代に甚だ妙な一つの掟の布かれてゐたこ



とである。この掟は、幕府側からいへば、島民に對する特殊な厚意的保護といふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたのだらう。その掟は、たとひ難破船、漂流者が寄つて來ても、若しそれが本土の人であるならば、一物をも與へないですぐ追拂へ。但し利島、新島など所謂伊豆列島の住民だけは例外として、炭水を供給してもよい。こんな有様だつたから、交通、貿易、移住などは絶対に嚴禁されてゐたのである。この驚くべき慘酷な鎖國主義の掟のあつたといふ事實で、始めてその生活の原始的なもの、島民が一種固有な發達を遂げたのも、稍明らかに理解された。

二一 正覺坊

北原 白 秋

(一)八丈島の南方  
百八十里、東  
京府下

麗かな、麗かな、何ともかともいへぬ麗かな(一)小笠原の初夏の一日である。宮の濱の白い弓形の渚から、影の青いバナナ畑の方へたどり上る小徑のそば、小灌木林の境界線に近く、一本の光り輝く護謨の大樹が高く高く揺めいてゐる。その下に正覺坊が仰向に轉がされてゐるのである。たゞそこにいつから轉がつてゐるともなく、轉がされてゐるから、たゞ轉がつてゐるといふ風である。大きな大きな正覺坊が、ゆつたりと眞圓い卵色の腹の甲羅を仰向けて、たゞ轉がつてゐる。無論四肢は固く結はへられてゐるので、その鰭を動かすことさへ自由でない。圖體ずたいは大きいし、二條の太い荒繩まで



がぐるぐる巻に巻附けてある。それでなくとも、一旦轉がされたが最後、一日かゝつて起返るか、二晩かゝつて起きられるかこの大様おさまなのろのろの海龜の身では、何だか頗る怪しいものである。嬉しいのか、悲しいのか、苦しいのか、またはとうとう諦めはててしまつたのか、これぞといふ氣ぶりも見えない。たゞ首を當りまへに出して、當りまへに目をあけてゐる。そして何のこともなく空を見入つてゐる。尤も、それも仰向いてゐるから、目が空に向いてゐるといふだけである。澄みわたつた明るい天の景色を見つめてゐるといふのか、または麗かな雲の行き來や、風の流に恍惚と思を凝らしてゐるといふのか、それとも碧瑠璃な大海の響、檳榔、椰子、バナ

現心

ナ、種々な熱帯の植物の匂を現心まごころもなく嗅分けて、懐かしい生まれの海の波のまにまに靈魂を漂はしてゐるのか、何が何とも譯のわからぬ夢見るやうな眼をあけてゐる。時は正午である。初夏といつても小笠原の初夏は暑い。太陽は直射し、愈々護謨の大樹の眞上から強烈な光の嵐を浴びせかけると燦爛たる護謨の厚葉が、枝々に限りもなく重り合つて、眞青な油ぎつた反射を、影と共に空一杯に揺めかす。その葉を潜



坊覺正の島原笠小



つてくる光線は、鋭い原色の五色である。それが幹に當り、下に寝てゐる正覺坊の腹を焼きつける。さうして愈、緑と黄との點々に模様づけられた綺麗な海龜の頭が、軟かな雜草の上に更に艶々と光り出し、麗かな何ともかともいへぬ空のあたりで檳榔の葉が戦ぎ、鶯の鳴く聲が聞えてくる。

十方無碍光澄輝く白金寂莫世界のひと時である。

正覺坊は眩しさうに目をあけたり閉ぢたりしてゐる。現心もないらしい。たゞゆつたりと轉がされてゐるので轉がつてゐる。大安心のかたちである。恐らく自分が囚れの身であることすら忘れてゐるに違ひない。

微風がをりをり護謨の枝々を戦がして去つた。幹の中ほ

(一)小笠原列島中  
の

どに一流れ流れた海の美しさ。向ふに兄島が見え、麗かな麗かなその瑠璃色な海峽を早瀬に乗つて、白い三角帆を上げた獨木船が走つて行く。さりながら正覺坊にはその海が見えない。頭を海の方に向けては寝てゐるが、背後には護謨の樹の幹があり、海岸煙草の毛深い葉の叢がある。たゞこの島の四方八方を取圍んでゐる太平洋の波のうねりが、どこからともなく緩い調節を間のびに折疊んでゐる。それだけさはすが正覺坊の痴鈍な感覺にも、稍何らかの響を傳へるらしい。正覺坊は目を瞑つて、また目を開いた。

コケッコッコ、コケッ……コケッコッコ、コケッ……物に驚いた鶏の鳴聲が、丘の下の農家の方から聞えてくる。畑の



(1) Postand.  
フランスの劇  
詩人、西暦一  
八六八年—  
九一八年—  
(2) ロスタン作動  
物寓喩劇シヤ  
ントクレ  
(Chantelet)  
の主人公の雄  
鷄の名。

甘蔗やバナナの葉蔭を分けて、こちらへ逃げてくるらしい。一羽、二羽、それが次第に近づくにつれて、鳴聲を潜めてくる。かと思ふと一羽の雄鷄が、やがてロスタンの<sup>(1)</sup>シヤントクレのやうな雄姿を現した。白い舶來種の雌鷄が、何かを啄きながらついてくる。そのとたん、奇怪な大きい正覺坊の圖體が、ふいと前に轉がつてゐるのが目についた。と、忽ち驚の叫を立てて、ケケッコッ、ケケツ、ケケツ、ケケツ、ケケケと逃げて行く。そしてまたひとしきりせはしさうな叫聲が、甘蔗の向ふから聞える。

正覺坊はそれでもゆつたりとしたものである。平氣で大空を見上げてゐる。溫和さうな空色の瞳が艶々と潤みをもつて、たゞじつと麗かな天の景色に見入つてゐる。恐らくは傍に何事が起つたかも知らないであらう。身動きひとつしやうともしない。

—白秋小品—

### 二二 丘の上

吉江 喬松

小松と、薄と、矮い灌木の藪との續いてゐる丘の上へ來て、私はその藪の茂みの中に身を置いた。

丘はいくつかの巒をなして、背後に繞る連峰の中軸から分れて、平野の上へ迫つてゐる。その巒と巒との間には、小さないくつかの谿ができてゐて、その中には、蒼黒い藪疊の下を潜つて行く小流や、急な傾斜をした桑畑や、小松の原や、焼



跡の草原などが續いてゐて、農夫の作小屋の一つ二つが目にはいる。一つの丘の上へ來て見ると、谿を隔てていくつかの丘の頂が、背比へでもしてゐるやうに立つてゐる。

八月下旬の日の光、眞晝頃のこと、焙りつけるくらゐに暑さうだが、その光を亂してをりをり谿の中から、冷たい大氣の流がひそかに肌へ忍び寄る。

縁の狭い帽子は顔へ當る日の光を遮るけれど、背から肩から胸からかけて、一面に容赦なく照付けるのをそのまゝに、私は藪の中へ足を投出して、じつと身を縮め胸を抑へて、心臓の鼓動の靜まるのを待つてゐた。

耳もと近くで、すういすういと薄の葉が擦合つて、微かな

音を立ててゐる。藪の根本で蟲の聲が時々起つて、また細く消えて行く。

俯いてゐる領元から、日がじりじりと食入つて、痛いくらゐにも思はれる。けれど、その光が私の皮膚の細かな毛穴の一つ一つから、奥深くさしこんで行くのではないかと思ふと、疲れて濁つた私の血は、それが爲に鮮かな紅に變つて、勢よく運行しだすやうに思はれる。寧ろ胸を開いてこの光を胸臆へ吸ひこみたい。両手を開いてこの光を抱きたい。たぎり落ちる日の光の力を血管の中へ呼入れたい。明るい光が體軀の中を照らしたならば、ぼろ紙のやうな私の皮膚には、強力が増して來はすまいか。活々とした活力が欲しい。爽か

## 胸臆



な山地の空氣と日光とは、疲勞した私をまた生かしてくれるのではあるまいか。

　　ごうごうといふ物の響が、ふと私の背後に起つた。消えるでもなく始るでもなく、空中にたゆたつてゐる。

　　振返つて見ると、それ

は赤松の林だ。樹上に高く風がからんで吹去らない。薄紅の鱗をつけたやうな松の樹幹が、幾本も眞直に立つてゐて、頭だけを動かしてゐる。日は上からその葉の茂みを洩れて、地



(筆楊華山口)林の松赤

上に縞を織る。樹の根を繞つて、薄紫の草花が微かに咲いてゐる。ごうと吹いてくる風につれて、微かではあるが松の香が漂ふ。眞晝の日の光を受けて、樹幹から洩れる松脂まつたぎの匂、――山地の健康を思はせるその香が、空中に漂つてゐる。

　　平原地の林の中をいかにさまよひ求めても、聞くことのできない幽久の響。松の樹のこの單純林の奏する樂の音の中に、遠い昔からの山地の歴史が織りこまれてゐる。一簇の老樹の林のある中には、必ずいくらかの古墳がある。苔寂びた匂と松脂の香とは、一つになつてその風の中に漂つてゐる。

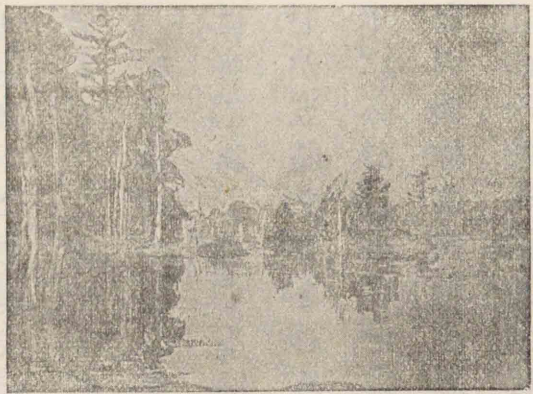
　　細長い薄の葉と、鼠さしの細かい針のやうな葉とが、入亂



れた影を私の手の上に落して、をりをり揺れてゐる。私は自分の手の上に描き出されたこの微細畫を壊すまいと、じつとその影の亂れつ寄りつするのを見つめてゐた。じつ、じつと思ひ出したやうに、蟲がまた薄の根本で鳴き出す。冷たい風が藪の中をはふやうに寄せてくる。

ふと藪の中から顔を上げて向ふを見わたした。谿を隔てて桑畑が稻田と同じ緑色をしながらも、濃淡のけじめをつけて、近く輝いてゐる。その中に鎮守の森と、地主の家の森とが、島のやうに點在してゐる。——見わたしのきく野は四五里を隔てて、その先に國境の連峰が鐵壁のやうに空を劃して立ち續いてゐる。

(一) 飛騨、信濃の國境に在る山。所謂日本アルプス中の一本。高九峰、米海抜三〇〇。



(一) 穂高の群峰が他よりも秀でて、連峰の上に高く聳えてゐる。鋼鐵でも張つたやうな八月の空を突裂いて立つてゐる連峰、その峰の間に消残る雪の條は白く閃いて、中空に反射してゐる。それより北に續いて、幾多の連山が果なき山の深さを見せて、遠く走つてゐる。幾たび見ても目醒めんばかりの山の姿だ。亂れた心を静め、動ずることのない

深さを胸に据ゑつけてくれる。山と空とを劃する力の籠つた、しかし、なだらかな微妙な一線、それをじつと見つめてゐる。



(Rhythm.)  
(韻律、節奏)

ると、絶えず一種の微動がそこから起つて、四方へ散るやうに思はれる。日の光と物の響と、そしてこの音なき山頂の動波とは、一つの混成したリズムをなして、山地の晝に爽かな活々とした調子を與へてゐる。

私の身内の血は、今こそ順調に動いてゐるぞといふやうに、強く胸をめぐる。はつきりした明るい心持、活々とした感じが五體を引きしめる。

ぴいつ、ぴいつと鋭い鳴聲を立てて、渡鳥の一群が丘の鼻の櫟林の一角から、下の平な桑畑の上を横切つて、向ふの丘の一端へ消えて行つた。幾千羽群れて行く小鳥の羽は、光の波を翻し、煽り立て、光と陰とを隈どつて、我後れじと争つ

て舞つて行く。ぱつと高く丘の上を乗越えたかと思ふともうその群の姿は向ふへ見えなくなつた。鴨の一群だ。蒔きたての大根の種子を漁り、出始めたばかりの粟の穂を求めて歩く渡鳥の群だ。身を隠す林があれば、忙はしげにその中へむぐりこみ、畑の獲物を見つけると、競つて舞ひおりの漂泊者の群集だ。光の中に潜つてゐる冷たい大氣の流動に促されて、あわたましい姿をして、彼等は丘を越え、畑を漁つて舞つて行く。

頭上の松の響も、谿の中の流の音も、藪疊の上を走る冷たい風も次第に高くなつて來た。静かな山地の眞晝は、今ひと時秋のくる前に、その鮮かな働を見せてゐるのだ。



私はいつまでもいつまでも、丘の頂に身を埋めてゐた。

—若き自然—

### 二三 空の景色

空の景色の壯大美妙なること、到底地上の景色の及ぶところにあらず。地上の景色は多く同一變化を反復し、その變化また緩漫なれども、空の景色は千變萬化して窮りなく、瞬時も同一状態に止ることなし。

雞鳴曉を報ずるや、東天一帯の曙光は夜の暗黒を破り、變  
變たる曉靄は白となり、黄となり、紫となり、淡紅色となり、深  
紅色となり、その他名狀すべからざる幾多の色彩を呈しつ

變變たる

つ、次第に消散して、光眩くさし出づる朝日の美しさ。これ朝

朝見るところにして、しかも朝々相

夏 同じからず。

一點の雲もなく晴れわたれる碧

空は、最も人の心を爽快ならしむ。さ

れど雲あるは雲なきに勝ることあ

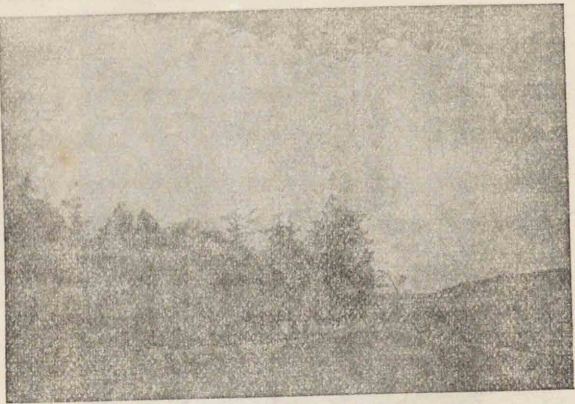
り。空の景色に無限の變化を生ずる

は、實に雲あるが爲なり。雲は離合集

散常なく、その起るや來る所を知ら

ず、その散ずるや徃く所を知らず、時々その容を改め、刻々そ

の色を變ず。炎熱燒くが如き夏の日、奇峰の如き白雲天の一



(筆 己 克 宅 三) 雲



角に現る、や、奇峰更に奇峰を生み、數峰合して一峰となり、一峰分れて數峰となり、一峰崩れて一峰また忽ち現る。

一天かき曇りて強風吹荒び、黒雲空を掠めて飛びちがふさまは、蛟龍の玉を争ふが如く、天馬の空を驅くるが如し。驟雨將に晴れんとして、暗雲の絶間を漏る、日光は、金箭を發射して周圍の雲を照らし、やがて空中に七色の虹を現ず。

風高くわたる秋の空、白雲重疊、大理石を敷列ねたるが如く、波紋の形に變じては、白波の天上に起るかと思はしむ。朝日、夕日のこれに映ずるや、忽ちにして瑠璃の如く、また忽ちにして琥珀の如し。

夕陽將に没せんとする時、山の端に立ちこめたる晚靄の、

或は濃く或は淡く、千種萬別の色に染めなさる、は曉の空に似たり。たゞ彼は次第に明るく、これは次第に暗し。



(筆風草野長) 月

よりて一層その美を加ふるものにして、薄雲に蔽はれたる春の夜の朧月は夢よりも淡く、秋風にたなびく雲の絶間より漏出づる月影は、鏡よりもさやけし。或夜ひそかに出づる

(一) 秋風にたなびく雲の絶間より、月のかけのさやけさ。  
(新古今集、左京大夫顯輔)

(二) さみだれや或夜ひそかに松の月。  
(豊太)



五月雨の松の月など、興趣最も深からずや、冴えわたれる大空に無数の星辰を望む時は、宇宙の洪大無邊なるを想ひて、莊嚴の感に堪へざるべし。

空の景色は地上の景物を待たずしてその美全けれども、地上の景色は空の景物を藉るにあらざれば、十分にその美を發揮すること能はず。花紅葉は太陽の光に照らされて始めて諸種の色澤を現し、山水の風景は雲霧霞靄の配合によりて雨奇晴好の趣多し。千古の雪を戴ける富士の高嶺も、一抹の白雲その山腰を掠むる時、益雄大の觀あり。霞の奥にもなほ花あるを思はしむる時、吉野山一目千本の光景は殊にゆかしきを覺ゆるにあらずや。

—高等小學讀本—

雨奇晴好

二四 九十九里

徳富健次郎

約七千里の海岸線をもつ本州日本には、日本海方面にも、太平洋方面にも、随分長い砂濱があります。上總の九十九里くらゐ美しい濱はありません。北、飯岡の岬から南、大東岬まで六町一里で九十九里、實測で十六里半の砂濱は、そこにその美しい形を破るべき一の小山、一の岩礁もなく、永劫に白波蹴立てて襲ひ寄る大東洋に對して、弛む時ない半月の弓をじわりと張つて、受けとめてゐます。九十九里の懷は淺い、最長徑が三里に過ぎない。しかし、胸は潤い、十六里半に及んでゐます。右に大東、左に飯岡、この二つの岬を兩腕と伸し

永劫



をたけび

て、十六里半の織い細かい軟かな砂は、をたけびして跳りか  
かる大東洋を、慈母のやうなその胸にやんはりとかき抱い  
てゐるのであります。この大きな胸の、いはば鳩尾つばねが片貝村  
です。片貝から南に隣して豊海村とよみがあります。その字の一を  
る栗生の里に、私は七月一杯を過しました。

私は閑靜を擇むので、片貝から南へ小一里も離れた栗生  
の小松原の中にある知人の別荘茉莉舎ばらゐを借りて、そこを自  
分の書齋にあてました。

松林の中の茉莉舎は、誠に靜かでした。卓に向かつて居る  
と、鶉うすが啼きました。尾長鳥が啼きました。波の音がします。松  
が鳴ります。朝の内は大抵風いで、暑いと思ふことがあつて

も、九時頃から極つて南風が海から吹いて來ます。日除の簾

がべとべとになるほどの潮風です。

九十九里の七月は涼しい。もつと

九 暑くてもよいと思ふほど涼しいの

十 でした。起きぬけに一度、午後一度

九 海に入る外は、朝の地曳の魚買、夕方

里 の散歩、日さかりには白蚊帳（一）を、べー

濱 ル代りに頭から被つて晝寢をしま

した。外の小路で松から松に細引で

的をつるして、猿股一つで大弓を射

るのも樂みの一つでした。人通りが少いので危険はありま



Velil  
婦人の顔を包  
む塵よけ



(一)東京府北多摩  
郡千歳村宇粕  
谷

せんが、矢が砂にもぐつたり、松林にそれたりして時々探すに骨を折りました。そんな時は毎日のやうに、胡瓜、茄子、隠元、何くれと野菜を持つて来てくれる裏のKちやんが、子供の目ざとく探してくれました。<sup>(一)</sup>粕谷から持参した朝顔が、茉莉舎の手水鉢の下の籬に絡んで咲く頃には、庭の草地できりぎりすが鳴き出しました。七八歳の昔、水泳歸りのくたびれ耳に河原で聞いたその聲が、夢のやうに蘇つて來ました。茉莉舎からは庭の小松を見越して、鰯煮る家の、今は煙も絶えてゐる煙突のはづれから、ほんの少々ながら海が眺められます。七月の日が赫々と照つて、十數里の沖を流れる黒潮の、まだその先のその先の限りない先から、海原を掃つて

南風の曲  
颯々の音

乗地

くる南風が、氣を入れてしつかり吹く日は、濃い緑青<sup>くろしやう</sup>の海に、雪の流の跳り上り跳り上りするのが、茉莉舎の縁から見られます。このやうな日には、頭上の大空では、天を中斷するやうなすばらしい白旗雲が見る見る靡いて北へ流れ、茉莉舎を圍む何千株の若松の限りない松葉の一つ一つが、風に競うて南風の曲を歌ひます。人の靈魂を梳いて行くやうな颯颯のその音は、私共の存在を清々しくせずにはおきません。海の氣分もいろいろに變ります。右のやうに風と日との調子を合はせて乗地になつた花やいだ氣分の日もあります。催眠藥の霧などかけられて、九十九里のその懐ながら眠つたやうな日もあります。もの憂げな空がうす曇つて、さしも



の荒海が嗚咽するやうに聲を吞む日があります。かと思ふと、凄しい怒を起して、轟と吼えつゝ、千尋の底から湧上り、煮えくり返り、轟と崩れては再び地心へ轟と捲きこんで行く勢に、九十九里の陸は戦き、茉莉舎などは木の葉の如く震へる心地の日もあります。

— 新 春 —

(一) 英國の詩人ウ

イルフレッド・

ギブソン

(Whitred

Gibson)

の詩「氷車」

(The Ice-cart)

によつたもの

二五 夏の日の夢

西條 八十

街なかの役所の腰掛にゐて、  
わたしは涼しげな、しあはせものの馭者が、  
氷を扱ふのを羨ましく眺めてゐた……  
忽ちわたしはこの堪へきれぬ巷の

曇りよごれた炎熱を離れて、遠く

青玉色の氷山と、緑柱石色の溶氷の上を、

また、とこしなへの北極の夜の

しづかな冷たい紅玉の輝きの下を

さまよつてゐた。

ふしぎな朧の光に目くらみ、やがて

わたしは覺えず一つの灣に踏みこんだ。

そこには巨きな白熊たちが、

後足をふり立てて真逆さまに跳り入り、

濃青にふるへる海の中で、

かゞやく海豹を追つてもがいてゐた。

それを眺めてゐるうち、

いつかわたしも裸になり、



若い、壯さかんな海豹の群に交つて泳いでゐた。  
 尻尾で水をうち身をねぢひねり、  
 または俄に躍り立つて、  
 ひゞわれる氷こ 鹹しほい淵瀬ふちの中を進みながら、――  
 友と並びつもぐりつ、  
 やがてわたしらは、それら  
 うちあたる巨きな白い死の塊を後のちにして、  
 つひに遙とほかな無人の浮氷の上に、  
 音なく降りつむ雪の下に、  
 あへぎあへぎ横たはつた。――  
 雪は白く細かに、  
 をはりのない極地の夜を降りつもる。  
 とこしなへに無人の岸邊に

(一) 俳人。名は清  
 伊豫の人。明  
 治七年生。  
 芙蓉  
 支那原産の落  
 瀟木。高さ  
 四五尺。夏紅  
 色または白色  
 の花をつける。

降りつもる。  
 やがてわたしはその冷たく白く  
 降りつむ眠の下にふかく埋れる。  
 ふかく降りつむ眠の  
 降りつむふかき眠の……

馭者おんしやにはかに鞭むちを鳴らした。  
 わたしは驚いて腰掛をつかんだ。  
 目醒めれば相も變らぬ街なかの暑苦しき。

――新らしき詩の味ひ方――

芙蓉 [自修文]

高瀨(一) 虚子きよこ

八月の初頃であつた。ふと庭の面に芙蓉ふようの葉の大きくなつてゐ  
 るのが目にとまつた。いつもこの芙蓉の葉の大きくなつてゐるの









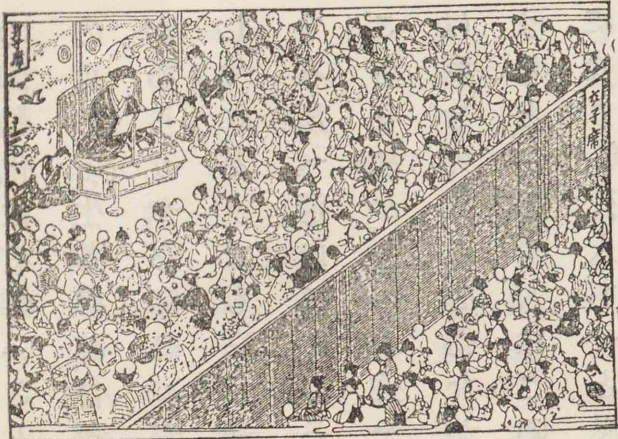


がござります。

或山家より京の町へ談義僧を招待に参りました。をりふしその日は雨降で道も悪く、駕籠を持つて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠にうち乗り、京を離れて三四里許と思ふ所で、どうしたとか、駕籠の底が抜けました。傷はしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、そこら驅廻つて、繩切多く拾つて來て、やうやうと駕籠をからげ、さて和尚に再び「お乗りなされ。」といふ。和尚も氣味悪けれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中に歩くも外聞悪く、不承不承駕籠に乗る時、「これ駕籠の衆、もう底は抜けはすまいか。」いえ、いえ、氣づかひはござりませぬ。」といふ故、乗移ると

不承不承

かき上げるとの拍子で、また底がめきめきいふ。和尚大きに



法談

肝を潰し、「これではなかなか安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。」といはれる。人足も尤もに思ひ、また繩切を拾ひ集め、合羽の上を豎横十文字にからげ、「これでは過はござるまい。」と、道を急いで或村を通りかゝつた。

たと見え、參詣の老若、道場の歸り足にこの駕籠を見つけて、



勸化  
無常迅速  
會者定離

肩衣をかけたる親仁が、傍の媪にいふには、何と皆の衆、けふの御勸化は有難いことではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離のことわり、何時如來様のお迎があらうやら、知れぬが人の身の上。あれ、あの駕籠を見さつしやれ。どうでも京へ奉公にいた人が死んだと見えて、死骸を在所へ連れていぬると見える。さてもはかないものぢやござらぬか。といふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞きつけ、さては我を死人と心得たか。忌々しい。と、わざと駕籠の中で、咳拂すると、かの老人はこの咳拂に驚き、急に傍へ飛びのき、小聲になりて、死人ぢやと思ふたら、どうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。といふ。和尚愈、腹を立て、今はたまり

合點

かねて、駕籠の中でちだんだ踏み、大聲あげて、科人ではおらない。といふ。その聲にまたびつくりして、さては科人ではなうて、どうでも氣違ぢやさうな。といはれた。これがおもしろい話ぢや。何分駕籠を外から繩がらみにしたもの故、誰に見せても死人ぢや。然るに中からものいへば、科人。といふもことわり、また、氣違ぢやさうな。といふのも、外からこじつけていふのではない。皆この方にその相、その模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。善いものを悪いとは人はいはぬ。何事も身を省るのが肝心ぢや。或人の道歌に、  
世の中は何もいはずに伊豫簾

その善悪は人に見えすく。

—續鳩翁道話—



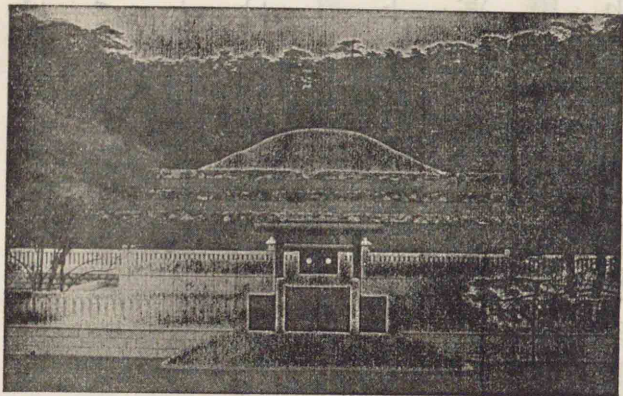
### 二七 桃山御陵

田山花袋

(一) 京都府紀伊郡伏見町に隣れる畑内村に在る小山  
 (二) 伏見桃山陵と桃山驛から東に北十町餘、明皇太后との陵  
 (三) 第四十代、奈良縣高市郡檜隈大内陵  
 (四) 第四十一代、天武天皇の后桓武天皇の陵  
 (五) 桃山陵の北西  
 (六) 第五十二代

桃山(一)の二つの御陵(二)では、いろいろなことが考へられる、今を以て古を考へるといふことがあるが、實際私は、その前に額づくつと、私たちの見て來たことばかりではなしに、遠い昔のことまでも取集めて考へられずにはゐられないのであつた。私はそこで、天武天皇の陵へ後から持統天皇の陵を合(三)はせたことなどを想ひ起した。また柏原の陵に御子の嗟峨(六)天皇が涙を流して祈念されたことを想ひ起した。それは、その大小はあつたにしても、昔ほどの天皇でも、皆私たちが見て來たと同じやうにして、一つ一つその陵を築かれたばかり

(一) 京都市の東南隅、四條天皇を始め數帝の陵のある所



りでなく、その當時の國民の悲嘆をも俱にその中に混せて、埋葬されたのであつた。であるのに、中世以後はどうなつたであらうか。さうしたことは絶えてしまつて、あの京都の東山の南のはづれに近い泉涌寺の中に、微かにその存在を示されるだけになつたではないか。そして元からあつた一つ一つの陵を、どでも、亡びた國の帝王の陵でも、あるかのやうに、全く顧られずに何世紀かを過したではないか。中には、どれがどれだか、わから



驕奢

なくなつたやうなものもあつたではないか。つまり、それだけ國が衰へ世が沈んでゐたので、さういふことをして置いてはいけないといふことは、足利時代の將軍も、信長も、秀吉も、家康も、またそれに續いた後繼者も、みんな知らないことはなかつたのであらうけれども、或は經營に忙しく、或は戦亂に追はれ、或は自己の驕奢に心も盲ひて、そこまで手を出さ餘裕はなかつたのであつた。しかし、長い間の歴史の波は、漸く大きなものを打出して來た。私たちは次第に闇い闇い歴史から、眼もきらめくやうな明るい方へと出て行つた。それを思ふと、維新の時に、山陵の荒廢に着目して、それによつて勤王の志を燃立たせようとしたもののあつたことなど

徒爾

卑屈

感傷的  
脱却す

も、徒爾には見逃してしまふことのできない事實であつた。桃山の御陵に參拜するものは誰か我が大倭おほやまとの昔を思ひ出さぬものがあらう。千年にして始めてその昔に還されたその明治天皇の偉きな功業を、自ら戸を閉ぢるやうな卑屈な政治の状態から脱して、飽くまで外へ外へと伸びて行かうとしたその立派な對外の硬政策を、何等の好運ぞ、私たちは大倭時代よりも、更に一層光輝あり力ある世を、ありありと眼の前に見ることができたのである。佛教などに悪くとははれて、夥しく感傷的になつた社會の空氣から全く脱却して、更に自由に大きく呼吸いづくことができる世に遭逢したのである。私は桃山陵の前に立つ毎に、いつも雄大な「時」の



羽風が耳邊を掠めて通つて行くのを聞得るやうな心持がした。  
——花袋行脚——

ゆかしの杉〔自修文〕

幣原 坦

(一)福岡縣(豊前國)門司市。税關。輸入品に税を課すること。司とる役所。  
好意。ねんごろなこころ。  
(二)山口縣(長門國)豊浦郡長府村。下關市より東西約二里。  
(三)乃木希典(長州の人。陸軍大將。伯爵。陸軍正元。九年九月と共。明治天皇に殉死した。年六十四)。

門司で税關長の好意によつて、我が船の碇泊中に長府の乃木神社に参拜する。神社の隣は乃木將軍の舊宅で、邸内は二百餘坪あるが、家の建坪は僅かに八坪餘に過ぎない。明治元年將軍が父十郎翁の指圖に従つて、北風を防ぐ爲に植ゑられた杉の苗は、もはや天を蔽ふばかりに成長し、將軍が歸郷の時、汲んで昔をしのばれたといふ井の水は、東北隅の老梅の下に今なほ湧いてゐる。あゝ、ゆかしの杉よ、懐かしの梅よ。

この杉の影は今はたゞ二百餘坪の風を防ぐのみでない。梅の香はまた井戸の邊に薰るばかりでない。その影は世界に廣がり、その

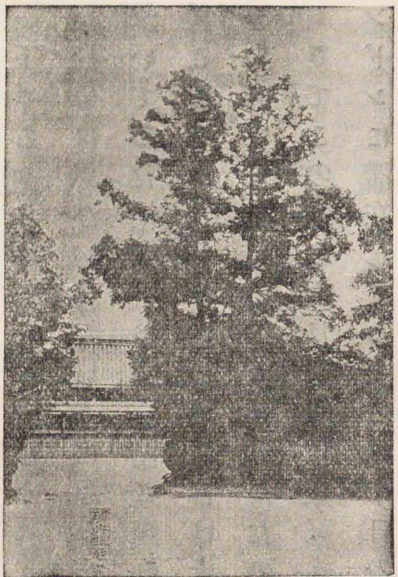
(1)Sudan.  
エジプトスダ  
(2)Khartum.  
ナイル河の上  
流。  
天涯地角  
極めて遠い地。  
(3)Captain  
Reggate.

見學  
當地に見て學ぶこと。

犬馬の勞  
君の命にしたがつて力をつくすこと。

(George V.  
(西曆一八六〇年)

戴冠式  
Coronations  
の儀式。ヨーロッパ諸國の君主が即位後にする重要な儀式。



ゆかしの杉の  
仙臺の師團に三年間見學をした人であつた。士官は自分に向かつていつた、

香は天下に満ちるともいふべきである。ずつと前に自分がアフリカの内地を旅行した時、スダンの首府カルツームに於てすら、乃木將軍崇拜の英國士官に會つたことがある。

天涯地角所もあらうに、こんなアフリカの内地で將軍崇拜者に

してゐますので、何とかして生涯の間に、一度將軍の爲に犬馬の勞を執りたいと思つてゐます。幸ひ英國皇帝ジョージ五世陛下の戴冠式には、將軍もロンドンに來られるといふ。その時分には、

私は日頃乃木將軍を敬慕

ゆかしの杉(自修文)



①Dublin.  
アイルランド  
の首都。

②Hyde Park  
Hotel.

使節

政府の命を奉  
じて他國へ使  
するもの。

前約を履む  
前の約束を實  
行する。

恰も好し  
ちやうど都合  
よく。

③現陸軍少將樋  
渡盛廣。

④第七高等學校。

私もこの守備の任務を了へて、ダブリン聯隊へ歸營すること  
になつてゐる。萬一あなたがその頃英國にゐられるならば、どう  
ぞこの希望を將軍に通じて、何か御役に立つことに私を使つて  
下さるやうに、取次いではくれませぬか。

自分は思ひがけない人に、思ひがけない依頼を受けて、初は少し  
驚いてゐたが、敬慕の情が面に溢れてゐるやうであるので、取敢へ  
ずこれを承諾した。そこで士官は大いに喜んで、自分がカルツーム  
を出發する時、堅い握手を與へたのであつた。

さてこの年の六月、英皇の戴冠式が行はれた。自分もその頃はロ  
ンドンに滞在してゐた。六月十日の朝、ハイド・パーク・ホテルに將軍  
を訪うた。これ一つには、日本使節の一行が無事にロンドンに到着  
されたのを賀する爲であり、また一つには、カルツームに於ける前  
約を履む爲であつた。恰も好し、將軍の接待係である在英國日本大  
使館附武官樋渡少佐は、自分が高等學校教授時代にその學校の生

萬端  
いろいろ。萬  
事。

①Morning  
Coat.

温厚篤實

ものやはらかな  
てまめやかな  
こと。

旅順の猛將

三十七八年の  
日露戦争の際、  
旅順攻圍軍の  
司令官として

勇名を馳せ  
たのは、普く人  
の知るところ  
である。

②Balkan.

歐洲の南部。  
③Belgrade.  
ユーゴスラ  
ビアの首府。

徒であつたやうな關係から、この人を通じて、一應レッグート大尉  
の意を傳へてもらふことにした。

然るに將軍等の一行に對する萬端の接待は、英國の皇室に於て、  
痒い所へ手の届くやうに行はれるのであるから、少しも個人の世  
話を要することはない。そこで手紙をダブリン聯隊へ出して、餘り  
に失望しないやうに、レッグート大尉へ申し送つた。事は成立しな  
かつたけれども、乃木將軍が英國の士官の中にもこのやうな崇拜  
者を有してゐられたことが、今更の如くに思ひ出されるのである。  
自分が將軍にハイド・パーク・ホテルで會つた時には、將軍はモー  
ニング・コートを着て、外出しようとしてせられる時であつた。それにも  
拘らず早速その部屋に通して、快く談話された。その温厚篤實なこ  
と、少しも旅順の猛將たる面影を認めることができなかった。

春風のそよ吹く如き感じは、たゞ自分ばかりでなく、誰でも同じ  
く與へられたものと見える。自分がバルカン半島を旅行して、ベル



Gland Hotel.

識別  
見わける。

驚異云々  
おどろき不思議に思ひながら。

裏切られる  
反対である。

奇縁

不思議な縁。

餘徳

先の人の徳としておいた恩徳。

勃發

にはかにおこる。

土着の人

その土地にすみつてゐる人。

歓待

こんせつなもてなし。

グラトドに着いた時、<sup>(一)</sup> グランドホテルの番頭が、自分を迎へてかういつた。

「あなたは日本人でせう。私はもはや一見して日本人を識別するやうになりました。なぜならば、數日前乃木將軍もこのホテルに宿泊されたからであります。東洋の英雄はどんな烈しい人かと、驚異の眼を以て部屋に案内しました。私の想像は全く裏切られました。將軍が温厚篤實な君子人であつたのには、全く意外でありました。この經驗は、私を將軍敬慕者の一人たらしめました。今日またここに日本の方を案内するのは、奇縁のやうに思はれます。」

自分は圖らずも將軍の餘徳を以て、世界大戰の勃發した災源地に於てさへ、土着の人の歡待に接することを得た。

しかし、多くの外國人の中には、眞に將軍の人となりを諒解してゐるものが多いとはいはれなかつた。否、乃木といふ讀方すらもよ

(一)海軍大將元帥  
東郷平八郎。

直覺的に  
見ただけ聞いただけで、  
共鳴  
他人と同様に  
感ずること。



く心得ない人々もあつた。但し將軍に對する人氣は、たいしたものであつた。英皇戴冠式の行列の中に、東郷大將と同乗の乃木大將の自動車が現れてくると、「ノガイ、バンザイ」と連呼する公衆もあつた。自分は或英國の老婦人に將軍のことを説明して、愛子のすべてを戰場に失はれても、御國の御用に立つてくれた」と喜ばれたといふと、その老婦人はこれをうち消して、「そんなことは想像せられるべきでない」といつた。馬小屋だけは立派に建てられたことを述べると、老婦人は始めて感服して、なるほど、動物愛護の精神にかなつてゐる。などといつた。

かやうに國民性の異なつた國に行くとき、乃木將軍の人格を知識階級の人に説明することさへ容易でないが、そこになると、我々同胞の間では、どんな無學の人にも、直覺的に共鳴を感ずる。



將軍の葬式の日、自分の家族は電車に乗つて、青山の葬場へ赴いた。車中の人々も、「あなたはどこへ。」私は青山へ。」と、多くは青山へ行くのであつた。身なりの卑しげな一人の老婆が、小倉の袴を着けた孫の手をひきながら、「あなたも青山へか。」と人に問はれて、

「はい、さやう。私の一人子息は、旅順で戦死した際に、乃木大將の下で御役を務めて居りました。その御恩を思ひますれば、何として忘れることができません。形見のこの孫をせめて亡き子息の代理として、御葬式に連れて行きます。」

一人子息が殺された時の大將を恨むことか、全くその反對に、忠實な感謝の誠意を捧げつゝある。このやうな純潔な崇拜者を有する乃木將軍の心事こころねあゝ、誰か泣かされないものがあらうか。

ナポレオンは必要なものを問はれた時、「一に金、二に金、三にも金」といつたとか。これまでの日本には、金よりも更に必要なものがあつたのである。

—世界の變遷を見る—

心事  
こころね

金よりも更に  
云々  
金以外に人格  
の必要をいつ  
たのである。

二八 感謝

吉田絃二郎

私は今地の上に立つてゐる。芝草は紅葉して、秋の陽を浴びてゐる。素足の指に觸れた地は、眞冬の寂しい眠を想はせるほど、冷たく静かである。

私は小暗い木蔭の下に立つ。四十雀の聲、かけすの聲、翡翠の聲、すべて秋の聲は餘りに静かである。秋の雲のやうに、私は小鳥の聲を聴く。どこからあの美しい、あの静かな獨語の聲が生まれてくるのか。聲といつてしまふのには餘りに美しい、餘りに清淨せいじやうな聲である。唄である。

私は芝草の上に立つて空を眺める。何といふ偉大な、そし

秋の雲  
澄  
清  
静  
秋の色  
疑  
思  
專  
念  
果  
中



て閑寂な雲の影であらう。眠りかゝつた午後の空を、絹のやうに白い三條の雲が水平にためらうてゐる。樺の上の空には、無数の綿をちぎつて捨てたやうな雲の群がある。見てゐる間に形が變つて行く。色合が變つて行く。

何といふ偉大な、何といふ無限な自然であらう。私はたゞ驚に打たれるばかりである。私は生きて空を眺めてゐることを、ほんたうに嬉しいと思ふ。有難いと思ふ。

草紅葉した原の上に、小さい丘がある。そこには紅と白と淡桃色との山茶花が咲いてゐる。黄ばみが、つた銀杏の樹、紅葉した櫻、下葉の焦げたひば、檜、杉などが山茶花の背景を作つてゐる。更に水のやうな秋の大空が遠景を作つてゐる。

Scene.

そしてこのやうなシーン(一)をば、渾然と或一つの豊かな色が、一つの調子が包んでゐる。いや、無限な色である、無限な調子である。掘りつくさうとしても掘りつくすことのできぬ。私は枯草の上に坐つて、この豊かな自然を眺めてゐる。私が百年生きてゐたとしても、無限に生きてゐたとしても、この自然の美しさは、神秘さは感じつくせないであらう。私の魂はこの自然の美と神秘とに咽せびさうだ。私はこの世界に生きてゐることを感謝せずにはゐられない。

私の足の下に白い野の花がある。見よ、私の頭の上の梢に、最後の葉が落日の光に顫へてゐるではないか。



たゞそれだけのものの中にも、生きて行くことの尊さ、有難さを思はせるものが十分ある。

地の上に霧がおりて来た。

かけすの聲、翡翠の聲、何といふ音楽的な聲であらう。

私は靜かにその聲を聴きつゝ、ある私自身の生活を祝福せずにはゐられない

—草光る—

二九 揚子江の秋(一) 南部修太郎

廣くおほどかなその姿、黄泥の水、悠々たるその流。自然の美と詩情豊かな江蘇平野の蕭條たる秋の眺を擅オシイマフにしながら、あの揚子江を下つた一日一夜を、私は今もなほ感慨深く

(一)支那本部の中央を東流する世界第四の大江河、延長約一千三百里、おほどかな江蘇省にある揚子江の下流  
蕭條

揚子江の朝



田南岳璋筆



(一)大正十年。  
(二)支那浙江省北部の開港場。  
(三)支那江蘇省の都會、東洋のベニスといはれる。  
(四)江蘇省西部の都會、蘇州の西北約五十里。  
(五)支那江蘇省瀋海道吳松江に臨む貿易場。

寥落

思ひ浮かべる。それは四年前の秋の半ばのことであつたが、  
杭州に靜雅な西湖の勝を探り、水の都蘇州を訪ねて、城内か  
ら遠い城外のいくつかの史蹟を巡り、更に南京を訪れて、荒  
廢した舊都の寂しい姿に、人事の悲しいはかなさを深く感  
じさせられた私は、その南京城外の下關シヤクワンから日清汽船會社  
の岳陽丸の客となつて、南支那の最後の旅路を、上海へと下  
つたのであつた。

南京に過したその前日は、寥落の都にもふさはしい時雨  
模様の曇日であつたが、それは一夜の中に名残もなく晴れ  
あがつて、その日は大陸の秋らしく、空は紺青深く、澄みわた  
り、稍黄色みを帯びた日の光も、明るく朗かであつた。そして



赤煉瓦の建物や工場の煙突の立つてゐる對岸の浦口の町、振返る南京城外の獅子山や鍾山の眺もくつきりとしてゐて、湖岸の蘆荻が静かな風にさやさやと戦いでゐた。

「けふは珍しいお天氣です。下關の宿屋から荷物をさげて、私を汽船發着所まで見送つてくれた若い支那人ボーイは、達者を日本語でさう私にいつた。

流れてゐるのかゐらないのか、殆どわからないやうな静かな水面を滑るやうにして、岳陽丸が上流の方にその瀟洒な姿を見せたのは、ちやうど正午時分であつた。私は埠頭階上の乗船口からすぐ船に乗りこんで、定め船室に荷物を置いてくると、また上甲板に引返して、手摺によりながら、棧橋

Boy.

の方を眺めてゐた。そこには支那人ばかりの三等船客たちや、荷役を争ふ苦力たちが、卑しく騒がしくひしめき合つてゐる。そのぶざまさに思はず不快な氣持をそゝられた私は、視線をそらして、反對の甲板の方へ足を向けながら、船の高みからすると、一層廣々と、一層明るく開けて見える江の景色に、うつとりと眺め入つてゐたが、ほどもなく鈍く尾を引いた汽笛が鳴響くと、船は緩やかな船足で、いつとなく埠頭を離れてゐた。

川の船路とはいへ、船は白塗の姿麗しい三千餘噸の岳陽丸である。そしてその大船を軽く波上に浮かべて、黄に濁る水靜かに流れ行く揚子江。川幅は時に五六町に廣がり、時に



Poplar

二三町に迫るが、曲折も大きくなだらかに、船はその間を機關の音も微かに、小搖ぎもせずに進み下つて行くのである。さすがに秋である。湖岸に美しく戦ぐ蘆荻も、ところどころうつすりと黄ばんでゐる。草を食む水牛の群、すくすくと群がり立つ<sup>(一)</sup>ポプラの木。垂葉の緑深い楊柳の蔭に憩<sup>イミユ</sup>ふ牧童の姿。それ等はいづれも江岸の好ましい眺であるが、岸近く立つ丘陵の頂に時々見える苔むした、朽ち



(筆楊春村中)塔の丘虎

崩れたやうな古塔の姿は、いづれもその昔榮えては、またいつとなく亡びた帝王たちの豪華の夢を物語るものであらう。杭州の雷峰塔、蘇州の北寺の塔、虎丘の塔、上海郊外の龍華寺の塔などと、江蘇平野一帯にそれぞれさういふ傳説をもつ古塔の姿を、いくつとなく見ることができ、殊に江岸に眺められるそれ等は、今も昔も變りなく流れて行く。長江の水に對して、人事のはかなさ、寂しさを、感じさせずにはおかない。

三〇 揚子江の秋 その二

五十哩ほどを四五時間に下つて、船が南岸の鎮江<sup>(一)</sup>に投錨

(一)江蘇省の河港。南京から二里。



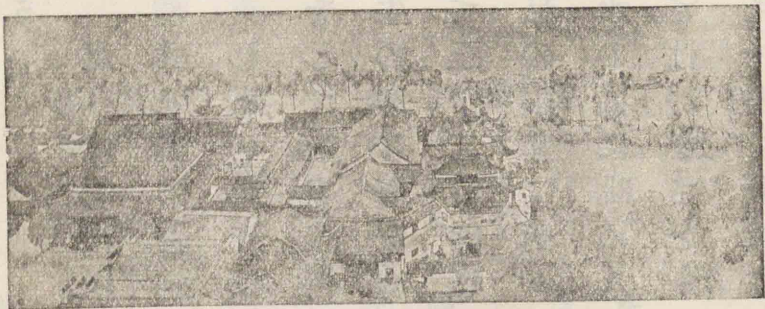
したのはもう黄昏の頃で、江を流れる静かな夕風も、何となく肌（一）に冷やかだつた。私たち日本人の一等船客四五人づれは、船長の好意で船を下りて、鎮江の町を小一時間ほど散歩して、すつかり日の暮れおちた頃、また船に歸つて來た。西方の空には三日月がかゝり、きらめく星影も美しく、江岸に沿うてぼつぼつと明りのついた鎮江の埠頭は、いかにも水郷らしい、しつとりした眺であつた。

「あれが名高い金山寺（二）で、ずつと向ふの山の頂に見えるのが甘露寺です。船長はうつすりとした夕靄の彼方を指さしながら、さう説明した。

船はまたいつとなく埠頭を離れて、蕉山島（三）の影を左にし

（一）江蘇省丹徒縣金山の上にある。今は江天寺といふ。

（二）鎮江の東北、揚子江中に在る。



金山寺 (山之信一筆)

ながら、静かな波間を滑るやうに進んでゐた。私は甲板の手摺によつて、思はずも異郷の旅人らしい感傷を誘はれながら、一人江岸の夜景に寂しい視線を投げてゐた。颯々たる冷たい夜風、柔かな機關の響、静かな船の蹴波の音、江の幅は次第に廣くなつて、岸邊の蘆荻も闇の中に吸はれてしまひ、三日月の影もいつとなく遠くの山の端に隠れて、空高き星の光のみひとり冴えて、夜は漸く更けて行く。すべては何といふ感慨深い情景であつたら



うか。

思へば有史以來三千餘年、或時は榮える帝王宮嬪たちの豪華な宴の畫舫を浮かべ、或時は醉詩人をして秋の月明を樂しませ、或時は傷ましい敗將の涙をさそひ、溯る人下る人をして、數奇多様な感慨を催させたに違ひない長江の水、人生のあらゆる有爲轉變もよそに流れて盡きず、盡きず流れて三千二百餘哩、今もなほ黃泥の水悠悠と、その偉大な姿を私の眼前に蜿々と延べてゐる。私は暫く視線を伏せて、暗い水の面に眺め入つてゐたが、自然の悠久に對して人生の短さはかなさを今更のやうに感じさせられて、思はず、賸の潤むを禁じ得なかつたのであつた。

有爲轉變

數奇

畫舫

宮嬪

三一 郊外所見

竹友藻風

一 鳥

澄みわたる空のおもてにくつきりと、  
 緑の枝をさし伸すくぬぎの林の、  
 どこからか絹を摺るやうな音がして、  
 我が上を飛過ぎたもの。

白い胸を見たばかりであるが、  
 行々子でもなく、雀でもない、  
 絹すれの音を立て、緑の林の  
 枝から枝へあたり行く群。

二 蟲



青みを帯びた夜の風が、  
 冷たく水のやうに行きわたる  
 郊外の家におゐて、聴くともなしに  
 數知れぬ命を聴いた。

こまやかに絲を紡ぐもの、  
 ほのかに砧を打つもの、  
 しやべり散らすもの、穢を織るもの、  
 思ひ出したやうに立ちさわぐもの。  
 すると、我が窓の下から  
 たゞ一つ歌を歌つたものがある。  
 また、くうちにその聲が止んで、

あたりがひっそりとした。

三三 秋のさ中

田部 重治

愈、秋のさ中になつて來た。春、眞先に芽生した櫻や柳の葉  
 はすでに地に委して、林を成せる武藏野の櫟は、高く大空に  
 沖してゐる。武藏野の空は、この頃は毎日のやうに降續いて、  
 人はたゞ空を眺めては、氣候の悪いことを歎いて居る。  
 私どものやうに、學校へ行つて、歸つてからは書齋に閉籠  
 り、明けてはまた學校へ行くといふ單調な生活をして居る  
 ものも、かういふ時節に際會しては、考へることがないでも  
 ない。時たまには、此の如き生活に對して、一つの捉れた心地



主觀的

(1) Baluch  
Spinoza.  
ユダヤ人系統  
に屬するオラ  
ンダの哲學者。  
(西曆一六三  
七年—一六七  
七年)  
(2) Hygh  
Miller.  
スコットラン  
ドの人(西曆  
一八〇二年—  
一八五六年)

を感じずには居られないこともある。しかし、再び考へる。捉  
れた生活と、さうでない生活とは、要するに主觀的な見方の  
相違に過ぎない。境遇に支配されなかつた人々も、過去に於  
て確かにあつた。(1)スピノザはどうであつたか。またヒューミ  
ラーは石工でありながら、大なる作物を遺したではないか。  
彼等は生活のいかなる状態をも、彼等自身の人格に統一し  
適用することを知り、それによつて毫も自身を攪亂される  
ことを許さなかつた。

雨の書齋に閉籠つて、麗しい秋を見す見す臺なしに送ら  
ねばならぬ悲痛を感じてゐると、私は北國の十月に想を馳  
せずには居られない。北國の九月と十月とは、一年中で最も

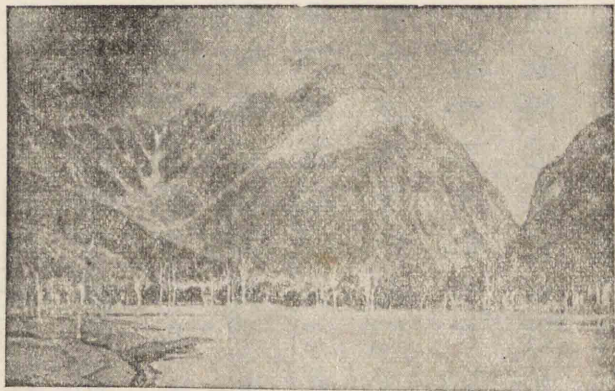
(1) 富山縣中新川  
郡。飛騨山脉  
中の高山

氣候の好い時である。稻刈の爲に次第次第に擴つて行く心  
地のする田圃、野末に屹立する立山一帯の連峰の眞白に輝  
き出すそのきびきびしさ、ところどころ畑中に催される豆  
焼の煙、朝霜を帯びた蕎麥の花、淡い煙の立つてゐる小川の  
面へ、榛の黄葉の間を震ひつゝ、裂けおちる朝の太陽の黄金  
色、朝まだ暗い間の栗拾などは、私の一生を通じて忘れるこ  
とのできない記憶である。

しかし、それ等にもまたいふにいはれぬ寂しみがあつた。眞  
白な峰の姿には、莊嚴の趣の外に、一種の寂しい凄みがある。  
稻刈の唄の聲には、沈鬱を包む節まはしがある。榛の黄葉の  
間を裂けつゝ、震ひつゝ、落ちてくる朝の太陽の光には、微動



(一) 隅田川の上流。  
 (二) 富士川の上流。  
 (三) 長野縣信濃川の上流。  
 (四) 利根川に注ぐ一支流。  
 (五) 富山縣中新川郡の山中から發して日本海に入る。  
 (六) 京都府賀茂川の分流。  
 (七) 長野縣南安曇郡島原から許北六七海里に在る。凡そ一五〇枚の高原。



上高地 (中川八郎筆)

する神經の惱がこもつてゐる。小川のさゝやきには、うら悲しい金の響のやうな惱が潜んでゐる。これ等の情緒が、知らず識らずの間に北國人の性格の中に溶入つてゐる。

また私は嘗て自然の間に放浪した時分に訪れた十月の荒川や、<sup>(一)</sup>笛吹川や、<sup>(二)</sup>千曲川や、鬼怒川などの上流の黄葉を想ひ起さずには居られない。また若葉の美を見たことのある黒部川や、<sup>(三)</sup>高瀬川や、<sup>(四)</sup>上高地の紅葉を想像せずには居られない。

示顯

そして落ちて行かうとする間際に、最後の緊張を見せようとする木の葉の示顯に、男性的な美の表現を感じずには居られない。かの晴れた秋の落日の、何とこの紅葉と共鳴する情調に富めることであらう。我等のこの自然に對する時の心持の、何としつくりと自分が自分と一致してゐるといふ感じを、強く且つ寂しく覺えることであらう。

私どもはいつも十月といふ聲を聞く毎に、一つの悲壯な力の暗示を感じる。生活の上に於て一種の犠牲と融合との心地よき情調を想像して、自分<sup>(五)</sup>はたゞ再び詩人に還つたかのやうな心地に動くのである。

— 渾沌より統一へ —

犠牲







かいくれ  
まつたく  
思想  
おもひ  
涸渴  
なくなりかわ  
くこと

鳳仙花  
鳳仙花科の一  
年草本。東印  
度の原産。花  
は紅、白色。

ました。私は提燈の明で、そこらを捜して見ましたが、長い口髭をは  
やした小さい歌うたひの姿は、かいくれ見出されません。たつた一  
人、この頃の照つゞきで、思想も財布も涸渴かわしたらしい蝸牛が、小さ  
い家に閉籠つたまゝで、笹の葉の裏にぶら下つてゐるのを見つけ  
ました。私の指がさはると、ころころと家ごと地べたに轉がり落  
ちました。私は氣の毒に思つて、なに、心配することはないさ。二三日  
するとまた雨が降らうといふものだ。と、口の中でいつて、慰めてや  
りました。

「すえりひ、りひ、りひ。すえりひ、りひ、りひ。……」

だしぬけに聲はうしろから聞えました。私はあわてて、ひよいと  
聲のした方を振り返りました。そこには鳳仙花が甘い咽せるやうな  
匂を、ぶんぶんさせて立つてゐました。夕方ばらまいた水は土を濕  
らし、葉を濡して、そこらをじとじとさせてゐました。私は提燈の明  
で、鳳仙花の葉を一枚一枚調べて見ましたが、草雲雀らしいものは、

そこらに見つかりませんでした。暗い下葉の蔭で、土塊つちぐらがむくむく  
動いてゐるのを、そつとのぞきこむと、隠れてゐたえんまこほろぎ  
の雄が二匹、あわてて飛出しました。

逃げまよつたこほろぎの一匹は、他を跳ねのけるやうにして、鳳  
仙花の莖に飛びつきました。するとその拍子に、ぴちつと微かな音  
がして、鳳仙花の實がはぜました。いくつかの小さい種子は、あたり  
に跳飛ばされました。おい、びつくりするぢやないか、そんな亂暴を  
して。私は口の中でつぶやきました。えんまこほろぎの雄も、長い口  
髭をひねつて、同じやうなことをいつたらしく見えました。ことに  
よつたら、それはどつちも間違で、物蔭に隠れてゐた草雲雀が、さう  
いつたのかも知れません。

私は提燈を提げて、畑の真中に突つ立ちました。不意に脚下にあ  
る青紫蘇のなかから、

「りんりん、……」

はぜる  
さけ開く。



けら (蟻姑) 直翅類  
の一小害蟲。第  
一、脚の先端  
が鋸齒の先  
達し、これに  
土を掘りこむ  
潜りこむ  
聴覚  
み。

よくせき  
ぬのつびきなら

と金属性の低い音が流れ出ました。けらだ。けらでもない、捜し出してやらう。私はさし足ぬき足して、青紫蘇の側にしやがみました。金属性の音は微かな足音をも、その聴覚に感じたらしく、すぐ鳴きやんでしまひました。私は雑草と一緒にたの青紫蘇の中を、提燈の明で捜しました。乾いた地べたに、たつた一つ小さい孔があいてゐて、けららしい頭が、そこからのぞいてゐましたが、私が明を近づけると、あわてて、すほりと引つこんでしまひました。地べたにへたばりついてゐるかたばみの下から、へつぴり蟲が一つはひ出して來ました。が、何かよくせきの用事でもあるらしく、小急ぎにいそいそと、暗い茗荷の植ゑごみの中へ隠れて往きました。すると、すれちがひざまに同じ暗闇の中から、何か一つ小さいものが、むくむくと動き出して來ました。よく見ると、せむしの恰好をした、土まみれのちいちい蟬の幼蟲でした。やあ、ちいちい蟬か。もうぢき九月にならうといふのに、御苦勞さまなことだな。私は思はずかういひました。十六さ、

十八にも云々  
十分熱しき  
いのを形容して  
いふ

げの豆の数が、十八にまでもならうといふ今頃になつて、このこの土の中からはひ出して來ようといふのは、餘りに遅過ぎはしないでせうか。大抵の蟬は、幼蟲の間を土の中で五六年は過すもので、中でも北アメリカの十七年蟬などは、地下生活を十七年間も送るさうですから、このちいちい蟬も、そんなに長く眠つてゐるうち、つい時候を取違へたのかも知れません。  
「ほんとに御苦勞さまだな。蟬は雑草の中を搔分け搔分け、そこを突つ切つて、一本の玉蜀黍の幹にすがりついたらと思ふと、元氣よくぐんぐん上へ上へ攀登つて、やがて見えなくなつてしまひました。  
「すえりひ、りひ、りひ……」  
不意にまた草雲雀の歌が聞えだしました。私は小猫のやうに身を縮かめて、聲のする方へそつと提燈を突出しました。すると、「……すえりひ、りひ……」といったばかりで、歌は急に聞えなくなり、ました。附近はひつそりしました。瓦の下かどこかで、おかめこほろぎの



曲折 變化。  
 平凡 普通で、少しもすぐれたところのないこと。  
 一本調子 變化のない調子。

眞頭盧 佛入滅の時、度後の衆生濟たといふ悟得の人。  
 行ひ澄ます 佛道の修業をじつとしめる。小坊主といつたのであつた。

「りい、りい、……」と疲れたやうな聲で鳴くのが聞えます。おがめこほろぎは、明るい晝間は、すつとん、りい、りい、すつとん、りい、りい、……」と、曲折のある節で鳴いてゐますが、夜になると、この平凡な歌うたひも、晝間の疲が出ると思えて、だるさうな聲で、「りい、りい、……」と一本調子に鳴いてゐるのが、何だか氣の毒に思はれます。

暗闇の中でぼんやり赤いものが光つてゐるので、提燈の明をさしますと、それはほゞづきの木になつてゐるほゞづきの實でした。私は提燈を地べたに置いて、ほゞづきの一つを引寄せて、そつとその皮を剥がして見ました。中には、頭の圓つこい眞頭盧さんのやうな小坊主が、行儀よく、つくねんと行ひ澄ましてゐました。

「眞頭盧さん、小坊主さん、何をしていますらつしやる。私は子供のやうに軽い氣持で、そつと聞いて見ました。小さい眞頭盧さんは、何一つ答へようとはしません。

「すえりひ、りひ、りひ、すえりひ、りひ、りひ、……」

だしぬけにまた草雲雀が鳴きだしました。今度は頭の上の玉蜀黍の葉で。

草雲雀は友を尋ねて、尋ねあぐんで、いまだに鳴きつゞけてゐるのです。私は捕へやうもないその影を、二度ともう捕へようと思はなくなりしました。

草雲雀はなほ鳴きしきつてゐます。しつとりした夜の大氣に、我と我が歌聲の銀の滴りに聽酔つてゐるかのやうに。

草雲雀の尋ねてゐる友は、ひよつとすると、この野菜畑には棲んでゐないのかも知れませんが、求めても、求めても、求め得られないものを求めて、夜どほし蟲は鳴きつゞけてゐるのかも知れないのです。その聲は銀のやうに白く、銀のやうに顫へながら。

「すえりひ、りひ、りひ、すえりひ、りひ、りひ、……」



(一)法相宗の本山、奈良縣生駒郡法隆寺村にある聖徳太子の建立

猿臂を延す

七大寺  
東大寺 西大寺  
興福寺 大安寺  
東大寺 興元寺  
法隆寺

三三

有名斑鳩寺  
法隆寺の鐘

高瀨 虚子

山門(寺門の入り口)をはいると、すぐ右側に寫眞や、寶物の説明や、くさぐさ(雑多)のものが並べてあり、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあんと呼んだが、返事がない。鐘がゴーンと鳴る。案内者はだまつて猿臂(長臂)を延して、戸棚の横から長い鍵を出して、我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見返りつゝ、その後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んで、コツコツとこねくるが、どうしても開かない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突込んだまま鐘樓の方へ行く。見ると、二階建のやうになつてゐる鐘樓



の下に、袴とも腰衣ともつかぬやうなものを腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つて居る。我等も案内者の後について行く。男が綱を緩めたと見ると、鐘がゴーンと鳴る。八さん、あけておくれ。わたしがその間撞(つ)いてるさかい。」と、案内者は代つて綱を持つた。寺男は黙つて綱を渡して、金堂の方へ走つて行つた。案内者は一二三四と口のうちに撞(つ)木の揺れる数を数へて、五つ目で撞(つ)木が鐘に當る。ゴーンと鳴る。嘗



てフランスから日本の美術を調べに来て居た人が、特にこの寺の鐘を賞めてゐたことを思ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて、鐘は露出して居ない。薄暗い所に、細長い形をした餘り大きくない鐘の、青錆が品よく古色を呈して附いて居るのが、窓から射入る光線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當ると、ゴーン、ゴウウ、ゴウウと、靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。余は堪らなくなつて、どうか僕にも一度撞かしてくれぬかと案内者に頼んで、教はるまゝに一二三と數をくりつゝ、五つ目に大きく引いて綱を放した。撞木が當るには當つたが、纔かに音を發したばかりで、涼しい清い梵音（佛音）は出なかつた。残念に思つて、今一度と數

梵音

をくつて、また綱を緩めた。前よりは稍好い音を出したが、それでも心耳を澄ます音ではなかつた。同行の把栗が、僕にも一つ撞かしてくれ。」と、綱を持つて撞いた。同様に力ない響であつた。漸く金堂をあけた寺男は歸つて來て、そんな撞きやうをしてはどもならん。」と、綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に復つた。

我等の撞いた鐘の音を、法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながらその力のない音に耳を聳てて、佛力の俄にかくも衰へたるかと、定めて驚いたことであらう。しかし、それはたゞ三撞きであつた。四撞き目は再び元の音に戻つて天日は舊の如く明らかになつた。嗚呼、この靈鐘を瀆した罪



は深い。しかし、法隆寺始つて以來、佛法の滅びるまで、この寺の鐘は何萬遍鳴ることであらう、何億遍鳴ることであらう。何億遍でも善い、そのうちの二遍だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次の世にこの罪深い余が、萬々一にも佛の國に生まれるやうなことがあるならば、それは確かにこの二撞きの鐘の音によることと信ずる。

この村は砧も法の響かな

三四 ひとの親

親子

ひとの親の心は闇にあらねども  
子を思ふ道に惑ひぬるかな

藤原兼輔<sup>(一)</sup>

<sup>(一)</sup>平安時代の歌人。世に堤中納言といふ。承平三年(一一九一)歿。年五十七。

<sup>(一)</sup>平安時代の歌人。醍醐天皇の朝に仕へた。

<sup>(二)</sup>菊池武時。元弘の勤王家。元弘三年(一一三三)多死した。年四十二。

<sup>(三)</sup>徳川時代の大儒。寶永二年(一七二五)歿。年七十九。

秋の日は山の端近し暮れぬ間に

はゞにみえなん歩め我が駒

夫婦

ふるさとに今宵ばかりの命とも

しらでや人の我をまつらん

同

伊藤仁齋<sup>(三)</sup>

みどり子を見れば涙のかすそひて

ありしむかしぞいとどこひしき

兄弟

松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まどみせし夜ぞこひしかりける

兄弟

小澤蘆庵



(一)平安時代の歌  
の人。村上天皇  
の朝に仕へた。

春日野のはらからこそは世の中の

うきたの森のなげきをもとへ

朋友

平兼盛

世の中にうれしきものは思ふどち

はな見てくらす心なりけり

よみ人しらす

思ふどちまどおせし夜は唐錦

たゞまく惜しきものにぞありける

— 明倫歌集 —

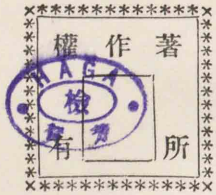
改訂 帝國新讀本 卷三終

大正十三年十一月十六日發行  
大正十四年二月二十三日發行  
昭和二年四月二十五日發行  
昭和三年五月二十五日發行  
昭和四年五月二十五日發行  
昭和五年五月二十五日發行  
昭和六年五月二十五日發行  
昭和七年五月二十五日發行  
昭和八年五月二十五日發行  
昭和九年五月二十五日發行  
昭和十年五月二十五日發行  
昭和十一年五月二十五日發行  
昭和十二年五月二十五日發行  
昭和十三年五月二十五日發行  
昭和十四年五月二十五日發行  
昭和十五年五月二十五日發行

(本讀新國帝訂改)

價	定
自卷一 至卷四 各	金七拾錢
自卷五 至卷八 各	金六拾參錢
自卷九 至卷十二 各	金五拾貳錢

清里製



編者 芳賀矢一

發行所 東京市神田區神保町一丁目三番地 富山房

代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場

發行所

東京市神田區  
神保町一丁目三番地

合資會社 富山房

電話神田二七一〇二二七八番  
振替口座東京五〇一番



第三學級

兒玉時光





第三學級  
兒玉芳光